新制女子國語讀本 巻四

46
810
大12

42189
教科書文庫
4
810
42-1923
20000
65483

吉澤治明

資料室

374.6
K810
大12

文部省檢定濟

大正十二年一月二十七日　高等女學校國語科用

新制女子國語讀本

開成館編輯所編

株式會社東京開成館藏版

広島大学
教
65483
図書

新制女子國語讀本 卷四

目次

一 明治神宮 その一……溝口白羊……一
二 明治神宮 その二……八
三 明治天皇御製（和歌）……一五
四 伊勢大廟より（候文）……（旅の書簡）……一八
五 初秋日記……沼波瓊音……二一
六 我が家の富……德富健次郎……二九
七 宮島にて（詩）……有本芳水……三二
八 武藏野の路……國木田獨歩……三六

九　武藏野の樹林……白石實　三…四三
一〇　カヴェル女史……四八
一一　沙翁の家……德富健次郎…五二
一二　德川光友の室……熊田葦城…五七
一三　詩歌の極致……佐々木信綱…六一
一四　我が袖の記……高山樗牛…六六
一五　婦人と話題……三宅やす子…六九
一六　一萬と箱王……（曾我物語）…七四
一七　かりがね（詩）……島崎藤村…八一
一八　ベルリンから（口語書簡文）……德富健次郎…八四
一九　ポンペイ物語……濱田青陵…八九
二〇　林子平の墓……菊池松堂…九五

二一　發明界の偉人……一〇〇
二二　蓄音機……吉村冬彦…一〇五
二三　二宮翁夜話……福住正兄…一一〇
二四　殿中の刄傷……村上浪六…一一四
二五　鰊の漁期……有島武郎…一二一
二六　桃源鄕伊豆の大島……有島生馬…一二四
二七　太陽と春（口語詩）……福田正夫…一三〇
二八　爆彈下のパリ……吉江孤雁…一三三
二九　平和は成れり……近衞文麿…一三八
三〇　菅公夫人……山田新一郎…一四五
三一　漢土雜話……（國定讀本）…一五三

自修文

一　妹安藝子……朝吹磯子……一
二　赤い鳥（童謠）……小川未明……六
三　月光の曲……（國定讀本）……六
四　梅が香（和歌）……一
五　子供とその父……武者小路實篤……一三
六　宿かりの死……志賀直哉……一九

新制

女子國語讀本　卷四

一　明治神宮　その一

溝口白羊

快美な色彩の反射と柔かい感觸とをもつ秋の陽光に包まれてゐる代々木の森　私はそれを仰ぎながら、そしてどこからともなく高く匂つて來る新しい檜の香を嗅ぎながら、幾度そこを通つたことだらう。森の中からは、時として、石を切るらしい金屬的の響や、木を削るらしい輕快な音が、快い調子を作つて流れて出た。或時は、六七丈もある大きな献木を牛車に載せて、多數の人夫が汗みどろになりながら、

溝口白羊　名は駒造、文學者。

代々木　東京市の西郊代々幡町の大字。

曳々聲で森の中へ引き入れるのを見たこともあつた。

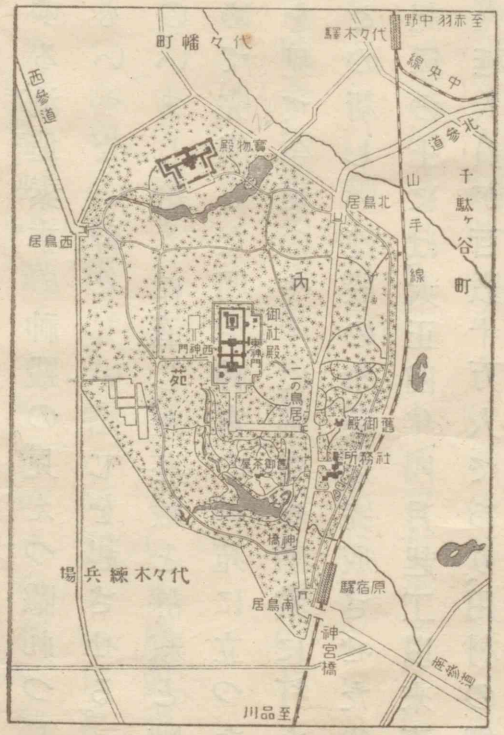
あの中に明治神宮が建つたのだ！　さう思ふと、私の心は莊嚴な或衝動を感ずると同時に、生みの親の墓に對するやうな強い懷かしさで充溢された。そして毎日のやうにそこを通る度に、工程が目に見えて段々捗つて、基礎工事が終り、小屋組が出來て、殿舍の形の次第に整つていくのが、たまらないほど嬉しく思はれた。

その明治神宮がとう〳〵竣工した。嘗て赤い土の露出してゐる上に、鋭く尖つた切石が幾つも列んで、烈しい日に光つてゐるのが見えた處には、今、清々しい色の小砂利を敷きつめた參道の白い線が、常緑の森の中に長く續き、その以前、疎らな松林の中から耕地の廣く展開してゐるのが見渡さ

れた御料地は、いつの間にやら、すつかり見違へるほど美しい景色になつて、森嚴と幽邃の趣を兼ね備へた欝蒼たる密林の中から、謂はゆる流造素木の神殿の見えつ隠れつしてゐるのが、なんともいへない神々しい感じを起させる。

神域！　眞に神のいまし給ふに適した莊嚴と靜寂と幽雅の領土。　私は始めて完成した明治神宮の神苑に立つた時、その改つた光景を見て、今更のやうに强烈な感激に打たれた。何者の力がこの新しい建設の事業を完成させたのだらう。造營局の記録の上には、大正四年四月起工以來、直接造營の事に當つた延人員が百數十万人であり、用材の總計が尺〆一万九千本であるといふやうなことが、細密な數字的計算に基づいて書いてあるが、さういふ數字を高く超越

して、隱れた部面に働いた強い力こそ、實にこの明治神宮の基礎を千載不動の固さに築き上げたものであつて、山よりも高い明治天皇の御聖德と、海よりも深い昭憲皇太后の御懿德と、そしてこの二柱の大神のお惠みに對へ奉る國民の至純な感謝の心情と、この三つのものが、陰に陽に工程を捗らせて、遂にこの記念すべき大工事を完成するに至らせた原動力である



明治神宮內苑平面圖

明治天皇御名は睦仁、明治四十五年御崩御、御年六十一。

昭憲皇太后御名は美子、大正三年御崩御、御年六十五。

ことは、何人も疑ふことの出來ない明瞭な事實である。

嗚呼、純粹な至誠の動機から出た靑年團員の造營奉仕、百里二百里の遠方から眞心を籠めて輸送して來た無數の献木。それらは何事を語つてゐるか。實にこの神宮の御苑を形成する一本の樹木、神殿を組織する一本の柱にも、悉く國民の燃えるやうな熱誠が籠つてゐるのである。かうして殆ど全く國民の誠意を以て完成したその宮居に、國民崇敬の標的たる明治天皇・昭憲皇太后の神靈が宿らせ給ふのである。なんといふ美しい尊い事實だらう。今までの神社に曾て見たことのない明治神宮の特色は、實にこゝに在るのである。

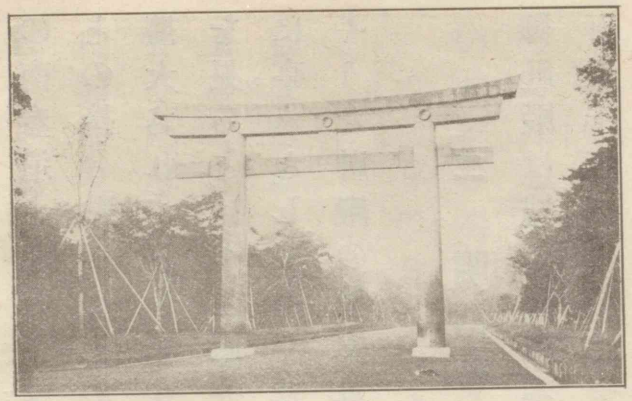
私は表參道を一直線に進んで、神宮橋畔第一鳥居の前に來

て、遠く神域の中を望み見た刹那に、第一にこのことを直感した。そして、一歩々々美しい小砂利の上を神殿に近く踏み入るに隨つて、いよ〳〵肅然たる心持になつて、深く襟を搔合せた。

參道の両側には、盡きることを知らない密林がどこまでも長く續いて、行くに隨つて段々濃くなつてゐる。鳥居から約一町ばかり奥へ入つて、神橋の處へ來ると、どこからともなく清冽な水の落ちる音が聞えて來る。岡山縣萬成産の石で出來てゐるといふ勾欄に凭つて下を見ると、溪流の趣を摸した風致のいゝ細流の両岸、筑波山の國有林から移した自然石の配置された處に、數十株の楓が今しも紅於の影を水面に落して、美しい秋の錦を織つてゐる。こゝは神苑

萬成　岡山縣御津郡石井村大字萬成。

中で唯一の人工を加へたところで、神苑の殆ど總べてが纖細な技巧を排した自然的の大觀を呈してゐる中に、特殊の庭園趣味を發揮してゐる。



明治神宮二の鳥居

神橋を渡ると、両側は一帶の杉並木になつてゐて、その左側の並木の斷えたところに、千七百四十といふ驚くべき樹齢を重ねたといはれる直立六丈餘の臺灣産檜の古木で造られた大鳥居がある。明神鳥居としては實に日本第一のもので、その高さは三丈九尺に達するとのことだ。

この鳥居の在る處は、南方原宿方面から來てゐる幅員八間の南參道と、北方千駄が谷から來てゐる幅員六間の北參道との接合點で、こゝから左折すれば、道は更に十間の幅員に擴大されて、西を指すこと百五十間、その道の盡きた處で右を見ると、ぱつと眼界は廣く且明るくなつて、約一町の北方に亭々として高く聳えた松の疎林を背景にした土佐繪のやうな神殿の檜皮葺を拜することが出來る。

原宿　東京府豐多摩郡千駄が谷町大字原宿。

千駄が谷　東京府豐多摩郡千駄が谷町大字千駄が谷。

土佐繪　土佐權守春日經隆の創めた繪畫の一派。

二　明治神宮　その二

御社殿は樓門・拜殿・本殿等の建造物を合せて、その總坪數六百五十坪。本殿は全部木曾御料林産の檜材を以て造られてある。近く拜殿に登つて拜すると、芳しい檜の香氣が強く鼻を撲つて、いかにも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は、即ち神靈のおはします内々院で、衆庶の漫りに窺ふことを許されない神聖の場所である。

木曾　長野縣にある。

何事のおはしますかは知らねども
かたじけなさに涙こぼるゝ

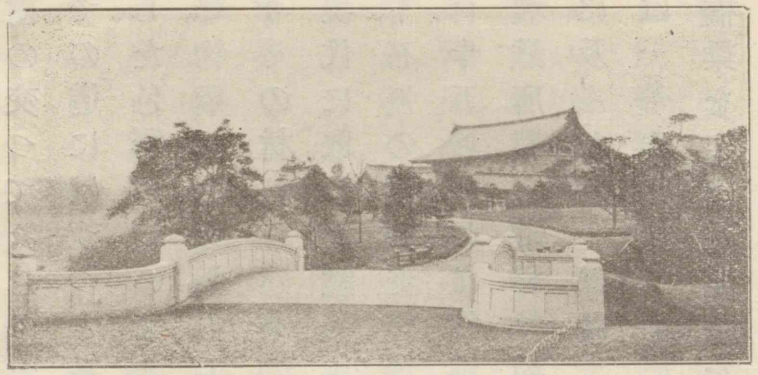
私は默禱を終へて、始めて向ふを見上げた。

まあ、なんといふ明るい快い感じをもつた社殿だらう。今まで見た大抵の社殿が、皆暗い周圍から來る鈍い光波の中に、靜寂な、しかし陰欝な感じを漂はせてゐる中に、この神宮ばかりは隱すところのない心持で、十分な光線に總べてを解放し總べてを暴露して見せてゐる。しかも、それでゐて、

何事の　西行法師が伊勢神宮に參拜した時に詠んだ歌。

決して淺露な心持はせずに、却つて一層深く大きくされた靜寂の中から、譬へやうもない莊嚴な感じが滲透して來て、自然と頭を下げさせるやうな强い威力が迫り寄るのを覺える。これでこそ明治天皇の神靈を奉祀した宮だといふことが出來ると、私はさう思つた。久しく宮廷に蟠つてゐた一切の舊弊を排除して、國民と近く接觸し、國民と親しく協力して、新文明を吸收しようとお努め遊ばされた明治天皇の活動的・進取的の濶達な御氣象に對して、その明るいお宮の感じが、いかにもぴつたりと呼吸を合せてゐるやうに思はれる。

拜殿を中心にして左右に均齊を保ちながら、長く兩翼を張つた廻廊に見える幾多の列柱、そしてその奥に續いて便殿



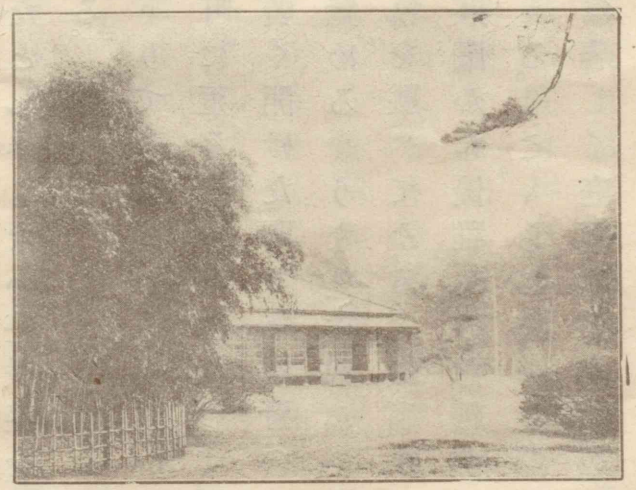
明治神宮寶物殿

の遠く望まれる心持、それら總べてがまたたとしへもない莊嚴美を語つてゐる。

拜殿を下りて、西神門から出ていくと、約一町に亘る森林帶があつて、その向ふ、廣く開けた明るい視野の中に、目の覺めるやうな芝生地が一面に緑の色を展べてゐる。嚴肅から快活へ、莊嚴から優雅への急轉がそこに見える。こゝらに來ると、周圍の林苑は著しく庭園風を帶び、樹林を組成する色々の樹種の中に、落葉

樹の交つてゐるのが少からず目に着く。寶物殿へいくまでの道には、ずつと長い間、さうした色彩が續いてゐる。

寶物殿は形式を中古時代に取り、その材料と建築の方法とを現代に取つた鐵筋コンクリート（Concrete）石張の建築で、建坪數實に五百十五坪、これに使用した八幡（やはた）製鐵所製の鐵材は、約十二万貫に及んだといはれてゐる。後は一帶の密林で、前には優雅な橋梁を架けた池水を控へ、その池塘を繞つて若々しい楓の



舊御殿

八幡製鐵所
福岡縣八幡市にある。

樹が美しく植ゑ列ねてある。

私は寶物殿まで來ると、再びもと來た道を表參道の枡形に近い社務所の邊まで引返した。このあたり、左右両側にある古雅な木柵を繞らした一構は、即ち明治天皇・昭憲皇太后の深い御由緒を留めてゐる舊御苑で、御苑内の建物は、舊御殿といひ、舊御茶屋といひ、いづれも御質素なものばかりであるが、御庭は實に田園の自然の景色そのまゝで、殊更技巧を弄しないところに、なんともいへない優雅な趣致がある。

この御苑は、祭神二柱の御在世中、殊に御愛賞遊ばされた處で、高く聳えてゐる松を背景にした芝生の上に點在してしをらしく咲いてゐる萩の花の幾株にも、熊笹の一面に生ひ茂つた小丘の上に連り續いてゐる櫟や楢の雜木林にも、東

京近郊では到底見ることの出來ない野趣がある。

私は此等を一わたり拜見し廻つて、涙ぐましいほどの強い感激に打たれながら、夕暮近くなつたので御門を出た。振返つて見ると、神殿のあたりはすつかりもう深い靄に包まれて、黑々と晝でも暗いほど生ひ茂つてゐる樹林の中を、かつきりと切り開いたやうに、路線の白い色が暮れ殘つて續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣分を起させた。

私の胸には、その神祕な境の中に、ほんのりと浮んで見える素木造の神殿と、檜皮葺の屋根を美しく流れてゐる優雅な曲線とが、神域を出てからも、いつまでも長く鑄つけられたやうに殘つてゐた。

一草一木の末にも、祭神二柱の御威靈の宿つてゐる森嚴な

幽邃な優雅な神苑よ。長い私の一生を通じて、果してこの深い印象を忘れる日があるだらうか。

三　明治天皇御製

とこしへに民安かれと祈るなる
我が世をまもれ伊勢の大神

照るにつけ曇るにつけて思ふかな
わが民草のうへはいかにと

曉のねざめ靜かに思ふかな
わが政いかゞあらんと

子らは皆戰の場に出ではてて
　翁やひとり山田守るらん

四方の海みなはらからと思ふ世に
　など波風の立ちさわぐらん

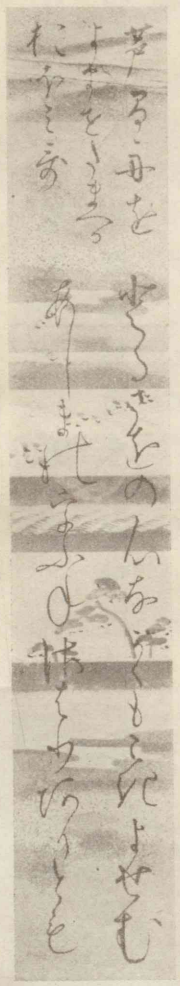
淺みどり澄みわたりたる大空の
　ひろきをおのが心ともがな

打ちむかふ度に心をみがけとや
　かゞみは神の造りそめけん

おもふことうちつけにいふ幼子の
　言葉はやがて歌にぞありける

まごころを歌ひあげたる言の葉は
　ひとたび聞けば忘れざりけり

明治天皇御製　昭憲皇太后御筆



よりそはんひまはなくとも文机の
　上には塵をすゑずもあらなん

蘆間舟を　よませたまへるおほみ歌
心となるさがくもの
こぎよせむあしまのをぶねさはりとも

涙の上に朝日にほひて鏡なす
　あをうなばらは明けはてにけり

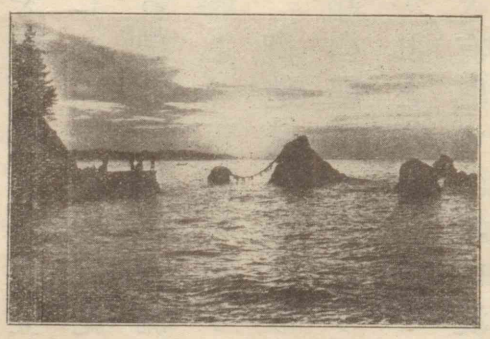
家なしと思ふかたにもともし火の
　かげ見えそめて日は暮れにけり

四　伊勢大廟より

三笠の山に暇告げ、笠置の古址に眼を投じなどする中に、汽車は木津川の清流畫の如き處に出で候。翠巒相疊んで碧水これに纏ふ處、石おもしろく點綴して、天工の美更に一層の美を極め候。かの赤壁の風光など未だ見たることもなく候へども、若し蘇東坡の月夜この水に泛んで、

三笠山　奈良市にある。
笠置山　京都府にある奈良縣の境。
木津川　淀川の支流、京都府にある。
赤壁　支那湖北省にある、揚子江の沿岸。
蘇東坡　名は軾、宋の文豪（1039—1101）

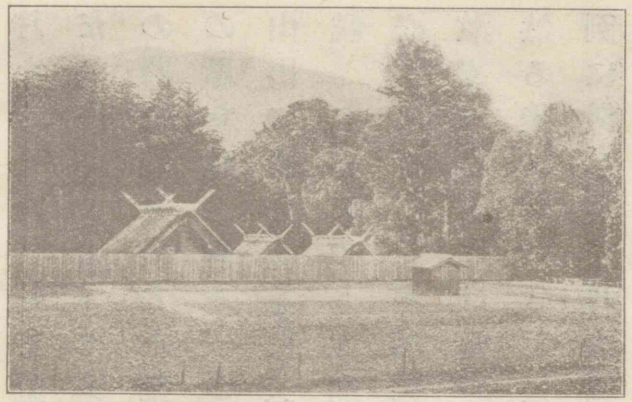
その流光を泝り候はば、何と歌ひ候はん。汽車中にては月なく、また詩情を動かすべき洞簫も聞えず候へども、ただ憑虚御風、飄々乎としてこの勝景の間を走り候こと、確かに羽化登仙の思を致し候。


二見が浦

山田に着し、直ちに二見が浦に向ひ候。この地の人、大廟を拜するには、必ずまづ二見が浦に至りて潮水に漱ぐか、さらずば海草の塩を嚙んで、然る後に參拜致し候由。予もこの例に倣ひ、翌早旦、夫婦岩のほとりに降り立ちて、海水に口を清め候。先年一月この浦に來り候時は、車上宮川堤の

宮川　大臺原山に發して伊勢海に入る、長さ三十二里、別稱度會川。

風に吹きさらされ候ひしが、今は電車にて往返とも至極便利に候。宇治橋に到りて、内宮の一の華表を拜し候。「降り立たんことも畏し神垣や御裳濯川の清き流は。」と、八田知紀ぬしの詠じたる御裳濯川の清流に手を洗うて、恭しく社頭に拍手を打ち申し候。御造營新に成りて、



伊勢大廟内宮

清淨無垢、一點の塵をも止めず、國民長久に安かれと鎭め守らせ給ふ御靈德、たゞ有難さの身に浸みて、御前の坂を登るだに身體わなかるゝほど畏く覺え申し候。それより電車にて外宮を拜し候。神路の山杉飽くまでも直に、高倉山の風はた靜かに、太々神樂の笛の音も澄み渡りて、神も遊び給ふかとそゞろに畏敬に堪へず候。「戴ける神符を土産にして、今宵東歸の途に就くべく候。」匆々。

（旅の書簡より）

降り立たんことも畏し神垣や御裳濯川の清き流は。

八田知紀　鹿兒島の人、歌人、明治六年歿、年七十五。

御裳濯川　別稱五十鈴川、二見が浦に入る、長さ四里。

神路山　一名天照山。高倉山外宮の上にある。

五　初秋日記

沼波瓊音

九月一日。子等皆久しぶりに學校に行く。兒童の通學を見るに至つて市街蘇ず。一高・大學の學生の姿もちらほら見ゆ。圖書館にして、十時頃休憩室に入り、ふと空を見れば、片雲の間に殘月なほあり。

二日。朝五時にしてなほやゝ暗し。東天のかの美しき雲

沼波瓊音　名は武夫、名古屋市の人、明治十年生、俳人、第一高等學校教授。

一高　第一高等學校。

大學　東京帝國大學。

圖書館　同大學圖書館。

を見よ。暈桃色したるが、昇らんとする日を逆さまに受けて、やう〳〵に輝き來る。屋根の瓦、露にしとり、家を繞りて悉く虫の音なり。

櫻の葉は土用の中より黄ばみて落ち初、むるものなるが、あはれに見え初むるはこの頃よりなり。溝際の礫の上に散り布きて、朝日受けたる、最も嬉し。

圖書館に至れば、暫く見ざりし富士山、藍色の肩を露したり。日漸く高うしてまた見えず。

今日風強し。木の葉頻りに落つ。館の避雷針の横に烏二羽あり、風に向ひ、羽をそよがせ、首を垂れて啼く。

休憩室に入る。ソファ(Sofa)の上に、壁に向ひて坐して眠る人あり。この人嘗てこのソファの上にてこちらに向き、洋服にて端坐し、手を拱き、瞑目して寂然たりしことあり。面白き人なり。年四十四五、瘦軀にして膚黄に、頭髪淋しく薄れ、面常に笑を帶ぶ。席には必ず唐本あり。

この頃、日々館前の砂利の上に曝書をなす。紙の飜るを砂利もて鎭したり。

風いよ〳〵強し。公孫樹の並木皆聲あり。雀、礫の如く飛ぶ。歸りて始めて今日の二百十日なるを知る。

對馬の人告別に來る。明日遙かに鄕里に歸り行かんとてなり。新秋の山海三百里、羨しいかな。

花開かずなりしより垣際に遠ざけたる朝顔の盆栽、葉の黄ばみたる、そこ〳〵に見えて淋し。

軒端の芙蓉、寶珠の如き緑の蕾は見えながら、未だ花瓣を現

すに至らず。

大粒の雨はら〳〵と芙蓉の葉を打つ。池暗く、金魚動かず。

夕暮近く俄に西の空晴る。富士の見ゆるを子等珍しがる。長女曰く、「あゝわかつた、富士山の上の平べつたいのは、上が天へはひつてるからだ。」少時にして、富士の彼方に雲簇りて金色に輝く。此方より見れば、この雲恰も山の縁を取りたるが如くなるが、漸くこなたおもてに匍ひ來るや、雲もて描きたる富士の如し。奇ならざるに似て甚だ奇なり。

忽然として厠の窓より夕陽射る。家も樹も皆暗き黄色に燻り、庭の梧桐の葉日に透きて、その色初冬の霜に遇へるに異らず。茶の間の向ふの障子また黄に照りて、そこなる電燈光なく晒されたり。

つく〳〵法師せはしげに競ひ鳴く。

三日。雨激しく降る。冷かなり。新しく貼りし障子そこ〳〵に立てたり。部屋に物蔭出來ていと懐かし。

四日。障子しめきりてなほ寒し。華氏六十八度なり。

五日。すこし晴れかゝりたるが、頓に蒸暑く、障子また外す。暮方より雨車軸を流す。雨少し小止みになる毎に、つくつく法師鳴きに鳴く。そのいら〳〵とせき立ちたる、志多くして齢傾きたる人に似てあはれなり。

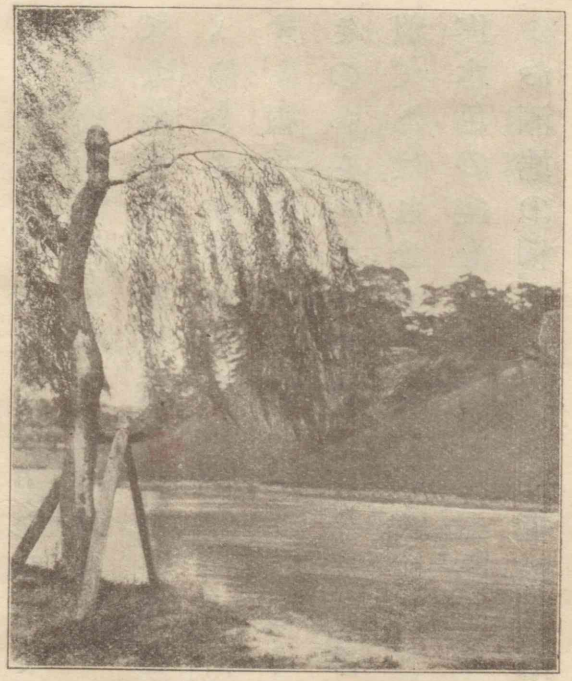
六日。風稍強く、白き雲、水色の空をずり行く。三宅坂のあたりに用ありて行く。お濠端の柳、葉の重みに堪へず、散るを待てる風情あり。お濠に小波頻りに起りて、お土居に低く枝張れる松の蔭に鶴の如き鳥見ゆ、何鳥にや。

三宅坂　東京市麹町區。

昨日あたりより、いつも來る納豆屋來らず。今日その時刻に、男の聲にて不慣れに賣り來る。あの女の納豆屋臨月らしかりしが、さては今産褥に在りて、夫代りて賣りに出でたるならん。皆々あはれがる。

七日。雨屢〻來りてしかも霽れず。夕暮近くなるまゝに、愈〻蒸暑し。

赤子ひとり茶の間の眞中にえんこして、頻りに右の手にて



三宅坂附近の濠

左の人さし指を握り、もぎ取る形しては、右の手を開きて見る。もぎ取りたるつもりにて、その指のなきを怪しむさまなり。

一女兒學校より歸り來て、洋服のまゝにて遊び居り。母「着物を脱ぎなさい。」といふ。「洋服だよ。」「洋服を脱ぎなさい。」「洋服だけでいゝの、シャツはいゝの。」「シャツも脱ぎなさい。」「靴下はいゝの。」「靴下も脱ぎなさい。」「靴下の紐はいゝの。」「靴下の紐をほどかないで靴下が脱げるわけはない。紐だけ取らずにゐられるなら、さうして見るがいゝ。」兒皆脱ぎ棄て、紐を解きて靴下も取り、さて足に更に紐のみ結びて遊び續く。かくて夜床に入るにも、なほこの紐のみ取らでであり。強情もかうなれば可笑し。

十一日。今日より圖書館始めて夜まであるなり。苦熱の間いかにこの九月十一日を待ちしよ。

朝疾く友人來る。ともに百花園に赴く。いつもこゝへ來る秋口の道面白しと思ふ。なんとなく心の細やかになる頃なればなるらし。

雁來紅・萩・紅蜀葵・芙蓉・葛花など、秋咲く花の悉く咲き競ひて、柔かく慕はしき氣の庭に滿つるに、空こゝより見ればいと低う見えて、白き雲飛ぶも人を離れたるさまなし。虫、夜の如く鳴く。

淺草に寄りて歸る。

それより圖書館に行き、夕方にも歸らで引續き居り。館の電燈つきたる心持、我またこゝに所を得たり。

百花園　東京市外寺島村（俗に向島といふ）にある。

十三日。始めて芙蓉の蕾に瓣の紅見ゆ。

十四日。芙蓉一輪開く。子等起き出で、歡呼して見る。「今日一日きりで落ちるのだ。」といへば、「つまんない。」といふ。

十六日。午前三時頃覺めて戸を推す。天地たゞ虫聲なり。幾十万の虫のさまゞ變りたる節奏の聲おのづから相諧和して、急促なる曲を成し、我が身も家もその曲を踏んでずり出でんとす。深夜の虫聲は美にあらずして莊重なり。

六　我が家の富

德富健次郎

家は十坪に過ぎず、庭はたゞ三坪。誰かいふ、狹くして且陋なりと。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狹しと雖も仰いで碧空を望むべし。神の月日はこゝにも照れば、四季も來

德富健次郎　熊本縣の人、明治元年生、蘇峰（名は猪一郎）の弟、文學者。

り、風・雨・雪・霰かはる〳〵到りて、興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆ。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて樹に滿つ。風ある日には、靑々と霞める空より白き花ちら〳〵と舞ひて、一庭須臾に雪を散す。鄰家に花樹多し。風に隨ひて飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るが中に滿庭花の筵を敷く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花瓣あり、山吹の花あり、李の花あり。庭隅に一株の山梔あり。五月闇欝陶しき頃、芳しき白花を開く。主も妻も無口なれば、この花の我が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に一株の碧梧あり。その幹亭々として些の邪なく、我が如く直かれと敎ふるに似たり。これと手水鉢の側なる八角金盤とは、葉廣うして我が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子欲しと思ふ心も起るなり。

つく〳〵ぼふしの聲に世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃え出で、たゞ一株前の家主の植ゑ殘したる黃菊も咲き出づ。名苑の花美しといふとも、秋のあはれ閑寂の趣は、却つて我が庭の一枝にあるべし。蜕巖の翁なりせば、「獨憐細菊近荆扉。」とや吟ぜまし。恥づらくは、「海内文章落布衣。」といふべき身にあらざることを。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして、樹は金よりも黃なり。

蜕巖　梁田氏、德川中世の人、明石藩の儒者、寶曆七年（一七五七）歿、年八十六。

獨憐…云々　蜕巖の九月九日の詩に、琪樹連雲秋色飛、獨憐細菊近荆扉、登高賦今誰是海内文章落布衣。

凩の風起れば、その葉翻々として翻り落つ。半夜夢覺めて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人はいふなる錦を、我は庭に敷きつめつ。木の葉落ち盡しては、流石に淋しげなるも、日影・月影愈多くなりて、空を見、星を見るに障なきは嬉し。

有本芳水

有本芳水名は歌之助、文學者

七　宮島にて

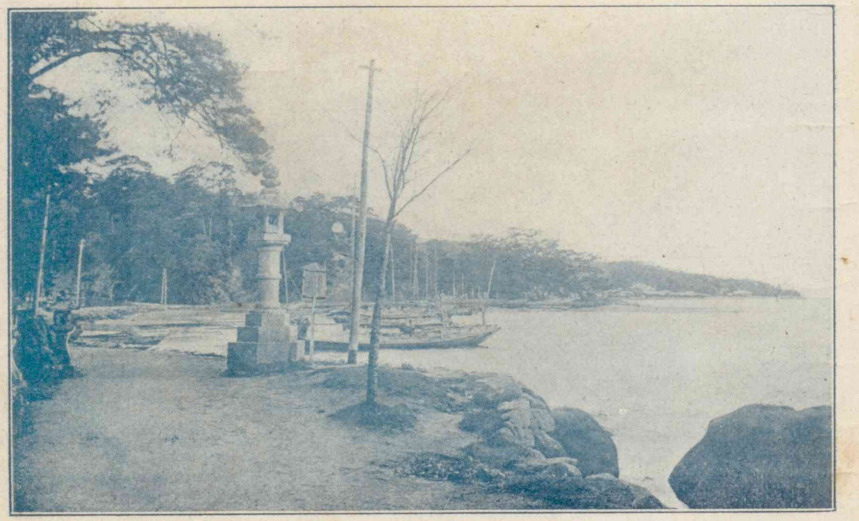
たゞ一人なる旅人に
船路も近し宮島や
入日は秋の山近く
沈みて島は暮れにけり

暮れて旅籠の欄に倚り
まぢかき海を眺むれば
海にうつれる月のかげ
さながら姫の櫛かとも

島は祭の宵なれば
月の光にそゞろきて
宮まうでする人々に
はしき少女も交るなり

秋の夕を悲しげに

嚴島神社



嚴島海岸

浦曲にひゞく笛の音
月は宮居に空たかく
鳥居のかげは水にあり

安藝の宮島巡れば七里……
月かげ青き海原に
唄おもしろく船漕ぎて
宮に來る子はたが子ぞや

心さみしき旅の身は
月の光にあこがれて
とほき渚のこなたより

宮居まぢかく歩み來ぬ

七段たかき、きざはしや
長き廊下を歩む時
ひた〳〵寄する夜の潮
さても龍宮に似たりけり

海の匂もなつかしき
丹なる柱に身を寄せて
笛の響を聞きゐれば
涙流れてとゞまらず

あゝ少女子よ燈籠に
赤き灯影を入れよかし
こゝろの鉦を打鳴し
歌ひあかさん旅の身は

八　武藏野の路

國木田獨歩

武藏野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも、足の向く方へ行けば、必ずそこに見るべく聞くべく感ずべき獲物がある。武藏野の美は、たゞ縱橫に通ずる數千條の路を、あてもなく歩くことによつて始めて獲られる。春・夏・秋・冬、朝・晝・夕・夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、雨にも、時雨にも、たゞこの路をぶら〳〵歩いて、思ひ

國木田獨歩　名は哲夫、千葉縣の人、文學者、明治四十一年歿、年三十八。

つき次第に右し左すれば、隨所に我等を滿足させるものがある。これが實に武藏野第一の特色だらうと、自分はしみじみ感じてゐる。武藏野を除いて、日本にこのやうな處がどこにあるか。北海道の原野には無論のこと、那須野*にもない。その外どこにあるか。林と野とがかくもよく入り亂れて、生活と自然とがこのやうに密接してゐる處がどこにあるか。

されば、君若し一の小徑を行き、忽ち三條に分れる處に出たならば、困るには及ばない。君の杖を立てて倒れた方へ行き給へ。或はその路が君を小さい林に導くかも知れない。迷はず行き給へ。林の中ほどに到つて、また二つに分れたら、その小さい路を選んで見給へ。或はその路が君を妙な

那須野　栃木縣にある平原、東西五里乃至七里、南北約八里。

處へ導くかも知れない。それは林の奥の古い墓地で、苔蒸す墓が四つ五つ並んで、その前に少しばかりの空地があつて、その横の方に女郎花などの咲いてゐるといふやうな處だ。頭の上の梢で小鳥が鳴いてゐたら、君の幸福である。すぐ引返して、左の路を進んで見給へ。忽ち林が盡きて、君の前方に見渡しの廣い野が開ける。足許から少しだら〳〵下りになり、萱が一面に生え、尾花の末が日に光つてゐる。萱原の先が畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、その林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡々しい雲が集つてゐて、

國木田獨歩

雲の色に紛ひさうな連山が、その間に少しづつ見える。十月小春の日の光が長閑かに照り、小氣味よい風がそよ〳〵と吹く。若し萱原の方へ下りて行くと、今まで見えた廣い景色が隱れてしまつて、小さい谷の底に出るだらう。思ひがけなく、細長い池が萱原と林の間に隱れてゐたのを發見する。水は清く澄み、大空を横切る白雲の斷片を鮮かに映してゐる。水の畔には枯蘆が少しばかり生えてゐる。この池の畔の徑を暫く行くと、また二つに分れる。右に行けば林、左に行けば坂。君は必ず坂を上るだらう。とかく武藏野を散歩するのに、高い處〳〵と選びたくなるのは、なんとかして廣い眺望を得たいと求めるからで、しかもその望は容易に達しられない。見下すやうな眺望は決して出て

來ない。それは初から諦めたがいゝ。若し君が何かの必要で道を尋ねたく思へば、畑の中にゐる農夫に聞き給へ。農夫が四十歳以上の人であつたら、大聲を揚げて尋ねて見給へ。驚いて此方を向き、大聲で教へてくれるだらう。若し少女であつたら、近づいて小聲で聞き給へ。若し若者であつたら帽子を取つて慇懃に問ひ給へ。大樣に教へてくれるだらう。怒つてはならない、これが東京近在の若者の癖だから。

教へられた道を行くと、道がまた二つに分れる。教へてくれた道はあまりに小さくて、少し變だと思つても、そのまゝに行き給へ。突然農家の庭先に出るだらう。なほ變だと驚いてはいかぬ。その時、農家でまた尋ねて見給へ。「門を

出るとすぐ往來ですよ。」と、すげなく答へるだらう。農家の門を外に出て見ると、果して見覺えのある往來だ。なるほどこれが近路だなと、君はすぐ微笑を洩すに相違ない。その時始めて教へてくれた道の有難さが解るだらう。

眞直な路で、両側とも十分に黃葉した林の四五町も續く處に出ることがある。この路を獨り靜かに歩むのはどんなに樂しからう。右側の林の頂には、夕陽が鮮かに輝いてゐる。をり〳〵落葉の音が聞えるばかり、四邊はしんとして、いかにも淋しい。前にも後にも人影が見えず、誰にも遇はない。若しそれが木の葉の落ち盡した頃ならば、跡は落葉に埋れて、一足毎にがさ〳〵と音がする。林は奥まで見透され、梢の先は針の如く細く蒼空を指してゐる。猶更人に

遇はない。愈淋しい。落葉を踏む自分の足音ばかり高く、偶一羽の山鳩の遽しく飛び去る羽音に驚かされる。

同じ路を引返して歸るのは愚である。迷つたところが今の武藏野に過ぎない。まさかに行き暮れて困ることもあるまい。歸りもやはりあらましに方角をきめて、別の路を當もなく歩くが妙。さうすると、思はず落日の美觀を獲ることがある。日は富士の背に落ちようとして未だ全く落ちず富士の中腹に群る雲は黃金色に染まつて、見るが中に樣々の形に變ずる。連山の頂には白銀の鎖のやうな雪が次第に遠く北に走つて、終は暗澹たる雲の中に沒してしまふ。日は落ちる。野には風が強く吹く。林は鳴る。武藏野は暮れようとして寒さが身に沁む。その時は路を急ぎ

給へ。顧みて思はず新月が枯林の梢の横に寒い光を放つてゐるのを見る。風が今にもその梢から月を吹き落しさうである。突然また野に出る。君はその時、

山*は暮れて野はたそがれの薄かな

の名句の思ひ出すだらう。

九　武藏野の樹林

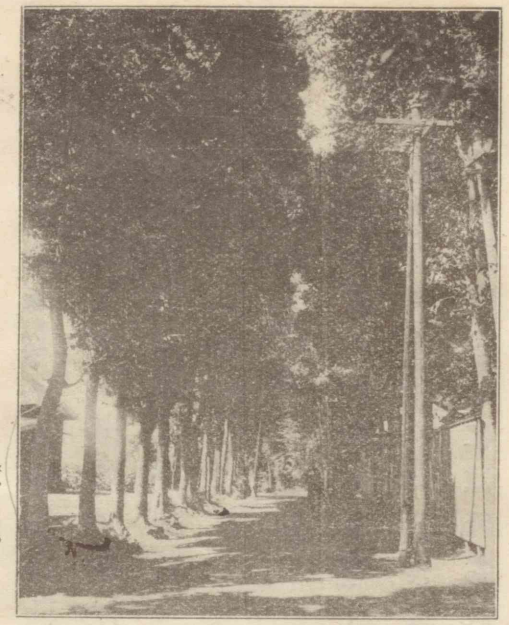
白石實三

東京から郊外の野に出る人達で、若しも西または北の國々に生れた人だつたならば、必ずや武藏野の村落の屋敷樹に特殊の感興を起さずにはゐられまい。青い草の生えた茅葺の母屋、古い大きな納屋、白壁の土藏、それらを西と北とから圍む樹々は、主に欅であり、若しくは竹藪である。

山は暮れ　與謝蕪村の句。

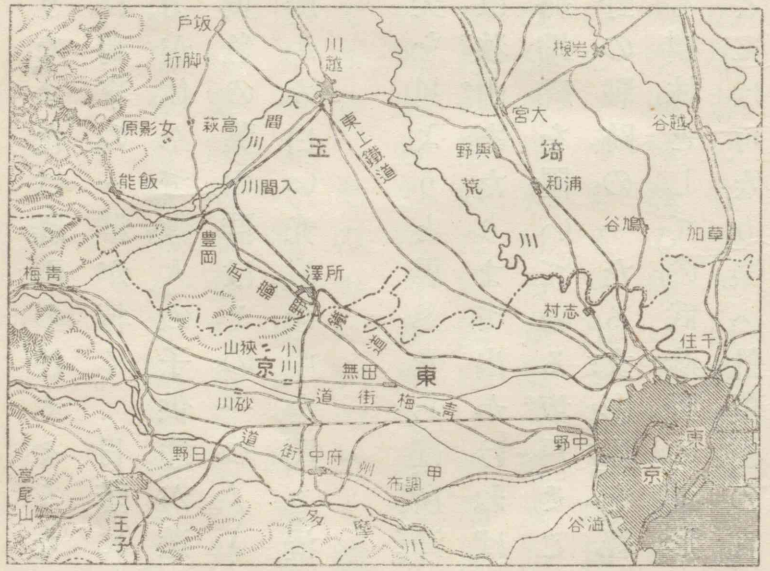
白石實三　群馬縣の人、明治十九年生。文學者。

それ、そこに、開放された庭に、廣い物干場が用意されてある。そして、暗い土間のあたりから、一種の野の訛を帶びた口調で、農民の妻がその子供達を罵り叱る聲が洩れ聞えて來る。



武藏野の行路樹

長い秋の宵に、または暗い冬の夜に、村落を貫く高い行路樹の間を通ると、家々からは紅い灯が洩れ、夜業の物音が賑かに響いて來る。中にも、青梅街道の養蚕地として知られた小川乃至田無のあたりは、この野に在つても、特に欅の行路樹が多い。あの重い、成長の速かな、そして野そのものを郷土とするやうな、この樹の軀幹と種子とを商つて生計の大きな助けとしてゐる人達は、我が武藏野に決して少くない。試みに、晩秋の溫かく晴れた日の午後、そのあたりまたは砂川若しくは志村邊の道路を選んで散策するがよい。その樹々は既に乾燥しかゝつた長大な幹を露



小川　東京府の町、國分寺の北一里半。

田無　東京市の西六里にある町。

砂川　田無青梅間。

志村　東京浦和間。

青梅街道　東京市から東京府青梅町に至る街道。

出して、枝葉の集團は嘯くやうな、または驟雨の注ぐやうな音を立ててゐる。それ、そこに、荷車の一群が行く。日蔭になつた飲食店の軒下には、車力が休んで、數人の子供達が遊んでゐる。褐色若しくは青黄色の葉の群は、その一つ〳〵に生命のあるもののやうに、鮮かな白い光波の中を閃き渦卷いて落ちる。

栗・楢・櫟・朴・櫻、それら雜木林の美を見ようと思ふならば、所澤乃至川越以西の武藏野、または狹山あたりまで出かければならない。今東上線がその終端驛を置いてゐる坂戸、そこから脚折・高萩、若しくはこの野の戰跡の一たる女影原を經て豊岡町に出る道路は、中にも樹林としての武藏野の遺形を最も多く存してゐる。そこには可なり深い針葉樹の官

所澤　埼玉縣、陸軍航空隊がある。
川越　同縣浦和町の西北四里半、所澤の北約五里。
狹山　東京府北多摩郡村山の別稱府中町の北方三里。
東上線　東京市外池袋驛から埼玉縣

林などもある。中部武藏野の榛莽に在つては、既に陸田或は耕地に狹められて、今はその空閑林藪の裡に入つて、靜かな默想に耽り得るやうなものの一つをも見出すことは困難である。これが原因の一は、都會に於ける薪炭の需要が減少したためである。そして他の隱れた原因は、この過渡期にある植物帶が、次第にあの西からの侵入者、即ち赤松のために荒されつゝあるからである。その中に在つても、適應性の微弱な、人工を多く要するやうな欅の樹がまづ滅されて行く。公孫樹・竹・薄のやうに、東洋的な、否むしろこの野に特殊な植物も、いつまでその生存と繁殖とを續け得るか解らない。

坂戸驛に至る鐵道。
坂戸　埼玉縣、川越町の西北二里餘。
豊岡　埼玉縣、川越町の西南約三里半。

一〇　カヴェル女史

世界戰爭中、各國の女子が國事のために盡瘁した美談の多い中でも、英國の看護婦エディス、カヴェル女史の刑死ほど、全世界の耳目を聳動したものはありません。

千九百十四年八月、ドイツ軍はベルギーの首府ブリュッセル市に侵入して、全市を占領しました。この時、カヴェル女史は看護婦會長として、助手達とともに、獻身的精神を以て負傷兵を看護しました。敵・味方の區別なく、苟も負傷したものは、誰でも女史の手厚い看護を受けたのでした。

*モンスの戰の後、英佛白聯合軍は南方に退却せねばならなくなりましたが、運惡くドイツ軍のために隊列を中斷されて、多數の兵士は虐殺されました。そして中には潛伏して

Edith Cavell
Brussels
Mons

*モンス　ベルギーの都會、フランスの國境に近い。

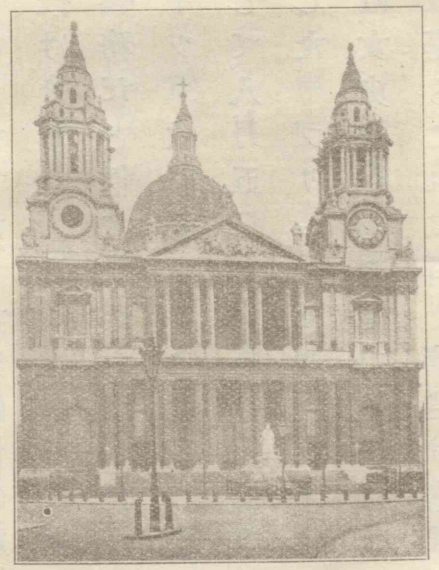
窃かに逃走の機會の到來するのを待つてゐるものも少くありませんでした。此等の兵士は、カヴェル女史の援助によつて、その目的を達しようとしました。女史は何の顧慮躊躇もなく、彼等の逃走を援けました。それは母國に對する義務だと信じたからでした。

エディス・カヴェル

ドイツ軍は間もなくこの事實を聞知して、八月五日、女史を逮捕監禁しました。ブリュッセル駐在米國公使は、女史のために極力救解に努めましたが、狂暴なドイツ國は毫もこれに耳を藉さず、審問の末、間諜としてその罪を問ふこととしました。かくて十一月十二日、まだ明けやらぬ曉の銃聲とともに、あはれ、女史が

慈愛の魂は、長へに昇天したのでした。英國の一僧侶は、女史が死刑の宣告を受けた十一日の夕刻に、女史を訪問しましたところ、女史は從容として、「私は少しも死を怖れてはゐません、母國のために喜んで死にます。」といひ、また、「愛國心ばかりでは十分といへません。私は何人に對しても、憎惡の念や冷酷な心など持つてはゐません。」といつて、最後まで極めて快活だつたさうです。

一たび女史銃殺の報の傳はるや、全文明國の老幼男女を擧



セントポールス

げて、哀傷と憤激との色をその面に現しました。そして英國では、上下悉くこれを悼惜し、*セント、ポールスに於て、盛大な追悼會を催しました。St. Pauls

千九百十九年五月、女史の遺骸はベルギーから*ウェストミンスター、アベーに搬ばれ、そこで特別祈禱會が執行され、次いでノーウィッチの古寺院の境内に、名譽ある改葬が營まれました。Norwich　越えて千九百二十年、ロンドンのトラファルガル辻に、女史の記念碑が建立されました。London　Trafalgar

*クリミヤ戰爭に於けるナイチンゲールが、慈愛の天使として今に世界の人々から欽慕されてゐることは、誰も知るところでありますが、そのナイチンゲールに優るとも劣らぬカヴェル女史が世界戰爭中に現れたのは、實に世界全人類

Crimea　Nightingale

セント、ポールス　ロンドンの大寺院の一。

ウェストミンスター、アベー　同上。

クリミヤ戰爭　西暦千八百五十三年に始つた露國對土英佛等の戰爭。

ナイチンゲール　英國の博愛家（1820—1910）

のために祝福すべきことでありました。

一一　沙翁の家

徳富健次郎

*十二月廿四日。朝食後、私どもは*シェークスピヤ(Shakespeare)の誕生の家を見に行く。ホテル(Hotel)の前通りを少し西へ往つて、すぐ斜に北西に入つたヘンリー、ストリート(Henry street)に、保存の手を入れた、古風な、正面に三つ破風の並んだ横長い家が即ちそれであつた。

下階の厨の跡から入つて、博物館に陳列されたさま〴〵の物を觀る。入場料は各、一*シリング(Shilling)づつ。案内者が色々説明する。シェークスピヤの名の出てゐる黄いろくなつた羊皮紙の書物など、よく見れば面白いにきまつてゐるのが

*十二月　大正八年。シェークスピヤ　英國の大文豪。(1564—1616)

*シリング　またシルリング、志の字を宛て用ひる、一磅の二十分の一、我が約四十九錢に當る。

並べてある。

私どもはそれを大抵に見て、古い木造階段を二階に上つた。圖書館がある。人間を知り悉して人間に愛想をつかさず、靜かに人生を觀じて、穏かに五十年の生涯を送つた、小父さん顔をした主人の古い油繪や、半身像、雜多な額の外に、古書蒐集者の垂涎に値する主人と同時代、或は以前、或はすぐ後の版にかゝる珍籍や、縁邊の人から主人に宛てた古風な綴字の手紙などがある。中央の卓には來訪帳が載せられ、日本人の姓名も數々あつた。七十餘の婆さんが番を

ヤビスクーエシ

してゐる。

私どもは一旦圖書館から下りて、別の案内者について、別の更に古い狹い木造階段を上つて、誕生の室に入つた。厨の眞上で、恐ろしく天井の低い室である。こゝに三百五十六年前の四月二十三日に、あの小父さんは生れたのだ。成人した後の塑像が一つ置かれてあるだけで、他には何物もない。壁といふ壁、天井、通りに面したたゞ一つの窓の硝子、それらは來觀者の樂書で一杯である。今は禁じられてゐる。案内者は私どもに樂書の署名の中について眼ぼしいところを四つ五つ教へてくれる。案内者が指で拭ふ下から、硝子戸に白く*スコットの姓名が讀まれる。*ブラウニングや*サッカレーなどの名も壁にある。天井にはあのつむじ曲

スコット　英國の詩人・小說家。(1771—1832)

ブラウニング

りの*カーライルが書いてゐる。「たとひ印度を失ふとも、シェークスピヤには代へられない。」と彼がいうた言葉を思ひ出す。此等の多くの名を見ると、いゝ爺さんの膝に群る孫や曾孫の心地がする。

誕生の家を見終へて、チャペル、ストリートにあるシェークスピヤの晩年の家ニュー、プレースを見に行く。黑ずんだ古風の木造家屋が、そこゝに昔のストラットフォードを語る。廣場に白大理石の禮拜堂形の噴水がある。米國の或個人の寄附にかゝり、*ヴィクトリヤ女皇の即位五

シェークスピヤ誕生の家

英國の詩人。(1812—1889)

サッカレー　英國の小說家。(1811—1863)

カーライル　英國の文學者歷史家。(1795—1881)

ヴィクトリヤ女の皇　英國女王。(1819—1901)

十年節に、イギリス第一流のシェークスピヤ役者のアーヴィング（Irving）が除幕したものだ。ニューブレースは、シェークスピヤが帶びて生れた使命をほゞ果して、四十二歳でロンドンから歸り、餘生を樂しむべく購つて、最後の十年を暮した家の跡である。彼は一千六百十六年の四月二十三日に、ここで五十二歳で死んだ。今の家は先の家の跡に建てられた家で、シェークスピヤの家そのものではない。しかし、隨分古い家で、そこにはシェークスピヤ及びその時代に關したさまゞの古い物が陳列されてある。

裏に出て、發掘された舊家の基礎を見る。蔦に埋れた井戸は彼も飲んだ水であらう。後園では園守が大勢作事をしてゐた。

*アーヴィング（1838—1905）

一二　徳川光友の室

熊田葦城

一

長局の方俄に物騒がし。「あれよ、あれよ。」と叫ぶ聲、ばたゞと走る音、只事ならじと覺ゆ。

夫人は居室に在り。悠然として騒がず、徐ろに侍女に命じぬ。

「五條を召せ。」

老女五條は召に應じて來れり。顏色靑ざめ、呼吸忙し。

「何事ぞ。」

夫人の言葉未だ終らず、五條は早くも口を開けり。

「一大事の候。只今、中山茂兵衛奥女中を刺し殺し、血刀を

徳川光友　尾張の國主、家康の孫、義直の子、元祿十三年（一六〇〇）歿、年七十六。

熊田葦城　名は宗次郎、福山市の人、報知新聞社員

提げて部屋々々を騒がし候。あれ〳〵、あのやうに騒ぎ居り候。こゝにおはしましては心元なし。早々御動座遊ばさるべし。」

夫人はきつと五條の顔を見遣りぬ。

「それしきのこと、なに一大事といふべきぞ。茂兵衛は乱心せりとこそ覺ゆれ。當番の男どもやがて取鎭むべければ、構へて騒ぐべからず。そこにゐよ。なんの周章つることかある。」

夫人は端然として座をも動かず。茂兵衛は間もなく庭中の井戸に身を投じて果てけり。事乃ち已みぬ。

二

一年は夢の如く過ぎぬ。

「去年の今日は、茂兵衛が奥女中を殺しし日には候はずや。あの時の恐ろしさ、今に忘れ候はず。」

侍女等、次の室に在りて、當時の事ども語り合ひけり。折柄一天俄に搔曇れり。

風捲き、雨奔り、電閃き、雷轟く。天色黯澹として、晝なほ夜の如し。侍女等は顫ひ戰きぬ。夫人は從容として平常の如し。忽然、火柱立ちぬ。轟々として天地も碎けんばかりに鳴りはためきぬ。先に茂兵衛の投ぜし井戸に雷の落ちけるなり。

侍女の中には、或は倒れ、或は氣絶するものあれども、夫人は顔の色だに變へず。

三

人はこゝに投じ、雷はこゝに落つ。

「不吉の井戸は埋めんこそ好けれ。」

奥役の議は忽ちに決しぬ。

夫人は大久保金兵衛を召して諭せり。

「雷の落ちたる井戸を不祥なりとせば、この邸、この庭、また皆不祥として改むべきにあらずや。井戸は底を浚ひ水を替ふれば仔細なきものぞ。舊き井戸を塞ぎて新しき井戸を穿つは、人を勞するのみにて、なんの益もなきことぞかし。」

金兵衛その理に服しぬ。埋井の議乃ち止みぬ。夫人の言ふところ理義極めて明白、人をしてこれを諍ふの辞なからしむ。識見雋邁なるにあらずんば能はじ。賢夫人と謂ふ

べし。

一三　詩歌の極致

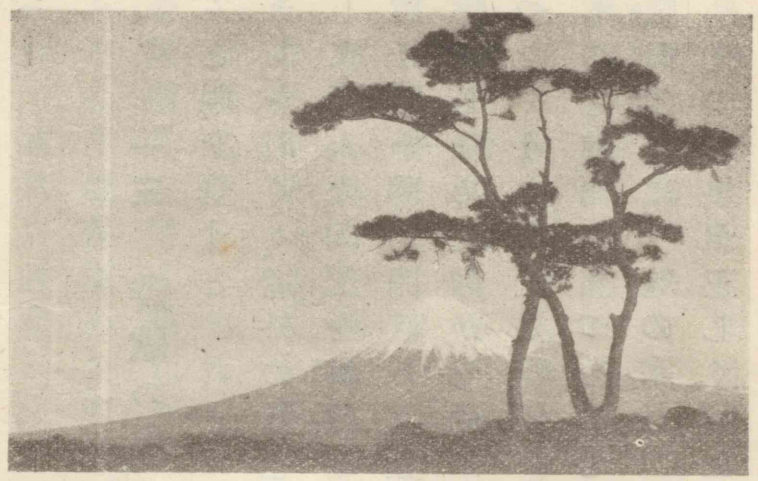
佐々木信綱

ふと眼を覺すと、それとなく夜明近いけはひである。カーテンを引くと、窓外の景色が見える。汽車は裾野驛を通過して、緩かな勾配を御殿場驛へと登つていくところである。硝子戸を聊か開けると、數日の旅に疲れた後十分に得た熟睡から覺めた靜かな頭が、曉の空氣に觸れて、玲瓏と澄みきつたやうに覺える。

ぢつと前面を見つめると靜かに薄黑く横たはつてゐる愛鷹山の上に、一輪の寒月が白く冷たい光を放つて、その東には、三つの星が正しく相並んで清く懸つてゐる。更に東に

佐々木信綱　三重縣の人、明治五年生、歌人、文學博士、東京帝國大學講師。

愛鷹山　富士山の東南麓、海拔三九一七尺。



雪の富士山

雪の富士が淡く仄かに天そゝり立つて、その東の肩のあたりに一つの星が煌いてゐる。神祕と靜寂との籠つた、なんともいへない光景の中に、自分の心は殆ど吸ひこまれたやうになつて、たゞ見守つてゐた。

汽車が刻々に進み、夜が刻々に明けていくにつれて、富士の色が刻々に變つていくのが解る。初は淡い白さであつたのが、やうやう明るくなつて來るにつ

れて、雪の色が段々白くなつて段々鮮かになる。すると、今まで曉の冷たい靄の中に眠つてゐた麓の杉の眞黑な木立や、間近い枯薄の搖いでゐる低い丘や、月の光を照り返す氷つた水田などが、やゝ明かになつて來た。こゝかしこに疎らにある賤が屋からは、白い煙の立つのも見える。戸を開け放つて焚いてゐる竈の火の赤いのも見える。爐の火が盛に燃えてゐるらしく、障子が眞赤に照されて、人影の動いてゐるのも見える。人間の生活は今や將に始らうとしてゐる。

こんな地上の景色を靜かに見下してゐる富士の面は、この間にまた變化を示した。東の空の紅の色が一段と增して來たのであらう、眞白だつた雪の色が段々と紫がかつて來て、神祕の裡から現れ出た山の姿は、今やいひやうも

富士を詠んだ歌

荷田春滿　聞きしより思ひしよりも見しよりも登りて高き山は富士の嶺。

賀茂眞淵　富士の嶺の麓を出でて行く雲は足柄山の嶺にかゝれり。

村田春海　心あてに見しかは白雲にて麓にぬ空に晴るゝ富士の嶺。

野々口隆正　雲かゝるゆゑ山は高けれど晴るれば富士の麓なりけり。

加藤枝直　天の原照る日に近き不二の嶺に今も神代の雪は殘れり。

ない莊嚴の趣を呈した。かくの如きこと二三十分餘、汽車は御殿場を經て、富士の姿を山蔭に見送つた時には、いつしか夜も全く明け離れて、月も星も光を朝日に讓つた。

自分は夢から覺めたやうに我に返つた。しかも、今しも見て來た富士とその裾野との曉の色の清らかさと美しさとが、幻のやうに眼から消えない。自分はこの大きな美に對して、頭が下り涙が眼ににじむのを覺えた。それとともに、心に打つが如く起つた考は、この清けさ、この美しさ、これこそ實に我が詩歌の極致であるといふ信念だつた。美はもとより到る處にある。或は深い心の惱みの中にもあらう、或は人の心を誘ふやうなあてやかさの中にもあらう、或は複雜な人事の曲折の中にもあらう。深刻といひ、艶麗といひ、優といひ、雅といひ、さま〴〵の境地はいづれも詩歌の領分である。我々はもとより美をさま〴〵の境地に求めねばならない。しかし、美の極致、詩歌の極致といふべきものは、この曉の富士によつて示された、この純な、まじりけのない、清く、美しく、しかも貴いこの感じの中に、これを求むべきであらう。若し美の神が人間にその姿を現すならば、そは實にかやうな景色に於てであらう。

かくの如きは、その時自分の考へたところである。しかも、更にこれを考へて、こんな自然の美に對して、こんな神韻を感じ得るのは、實に我等詩歌に志すものの眞の幸福とすべきではなからうかと思うた時、自分の胸は言ひ知れない喜に充たされてゐた

千種有功
たびたび見て千
雲風のめづらし
姿さだ
めぬ富士のし
ばし山。

一四　我が袖の記

高山樗牛

一　熱海の冬

熱海の二月は、誠に樂しき哀れ深き冬の暮しなりき。よそならば吹雪に閉ぢられて日影も薄き冬の眞中も、名にし負ふ暖地なれば、こちふく風も寒からず。むつきはじめの梅が香は早くも春を告げわたりて、野邊のやけあとの萌えそむるは人の心も時めく頃か。苫屋どもに岩海苔の薫れるもをかしく、芦の屋に心細く立ち登る煙も長閑かなり。海原遠く見渡せば、相模・安房の山々雲か霞の姿おもしろく、大島が根に立つ煙の風にたなびけるに、水や空とも分ち兼ねたり。おきの小島と誰が詠みたりし、初島わたり漕ぐ船

高山樗牛　名は林次郎、評論家、文學博士、明治三十五年歿、年三十四。

熱海　靜岡縣伊豆國の海岸の町、溫泉地。

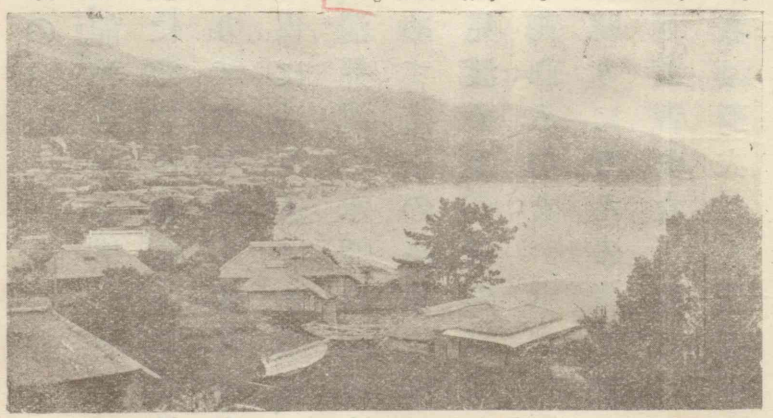
大島　伊豆列島の一。

おきの小島　箱根路をわが

唄の寄る涙毎に聞ゆるもゆかしく、魚見が崎のこなたより渚を傳うて、砂白く松青きほとり、濱千鳥の群れ飛ぶ樣もいとをかし。後には日金十國の山々を負ひ、前には天空海濶の間に一灣の春を擁する豆南の風光は、筆にはなか〳〵に及びがたし。

二　三保の春

松風遠く吹き合せて、波の音も微かなる、物思まさる夕なりき。我ひとり清見が關の宿を立出でて、三保の松原に遊ぶ。入日の影は雲にのみ



熱　海

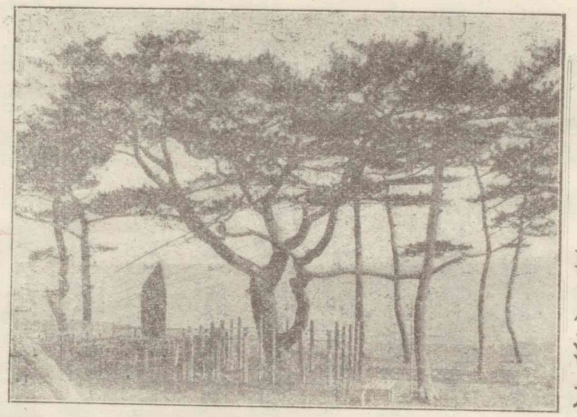
越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ。（源實朝）

初島　熱海の東南海上三里。

魚見が崎　熱海町の南端の岬。

清見が關　靜岡縣、こゝは興津町を指す、昔清見が關は今の寺の邊にあつた。

殘りて、月未だ上らず。田子の浦曲の夕凪に、千鳥の聲もいと稀なり。江尻・清水をはや過ぎて、龍華寺の輪塔を右手に見る。袂に寒き山風に入相の鐘を吹き送りて、初春のあはれ一入深し。三保に辿り着ける頃は、月漸く上り、清見潟の水煙は關路遙かに立罩めて、富士の高嶺に雪の色白し。見渡せば、一帶の松林木深く生ひ茂れるかな。木立の篩へる月の明りに、殘んの雪の色冴えて、杜の下道杳かなる、霞に落つる影もなし。波の音漸く近くして、我は羽衣の松に添うて



三保の松原の羽衣松

田子の浦　静岡縣、富士川口の海岸。
江尻・清水　ともに静岡縣。
龍華寺　静岡縣阿倍郡下二見村にある、法華宗。
清見潟　静岡縣興津町の南方の海灣。

立ちぬ。羽衣の松は我が年久しく思ひ焦れしものなりき。よし、さらば、今宵は月とともに立ち明さんかな。松は早く枯れて、幹の朽ちたるが殘れり。そのもとに、ゆかりを誌せる石ぶみありしが、月の光おぼろにして、今は見え分かず。あはれ、波の音と松風とのみぞ、今も昔に變らざりける。

一五　婦人と話題

三宅やす子

男の人で、それ〴〵違つた職業に就いてゐる舊友などが會すると、互に交す談笑の間に、何等か双方得るところがあるのに反して、婦人の集りには、とかく弊害ばかり多くて、なんの得るところもないのは、一體何故だらうか。

三宅やす子　京都市の人、明治二十三年生、故理學博士三宅恒方の妻。

話を交換するだけの日常の見聞に乏しいといふのもその一理由かも知れない。そんなことを聞いては、または話しては、失禮だとかなんとかいふ因襲的氣分に支配されてゐるのも一理由だらう。體裁よく、上品ぶつて、弱點を見すかされまいといふ褊狹な心が邪魔するのかも知れない。或はたゞ相手の服裝などに注意して、流行のものを着てゐるといつては羨み、流行後れのものを用ひてゐるといつてはそれをけなすやうな卑しい心が根ざしてゐて、自然自他の服裝といふことに、肝腎の談話の方よりも、より多く心を勞せねばならないことが大原因をなしてゐるのかも知れない。とにかく、多數の婦人の集る席上で、適當な話題を持ち出す人は殆どなく、たまゝ一人が持ち出しても、相手の方

でそれに應じようとしない。まづ話といへば、その日の天氣のこと、時候の挨拶、または「お子さん方はお變りありませんか。」と尋ねる。その返事は、「有難う存じます、丈夫でゐます。」とか、「この間お腹を痛めまして、幾日醫者に通ひました。」と答へるやうなぐらゐのことに過ぎない。

相並んで食卓に着いた時でも、隣や向ふの人と殆ど話らしい話をする人はない。默つてゐては惡いと思ふと、卓上の盛花を「綺麗でございますね。」とか、若し婚禮の披露宴でもあれば、「お嫁さんはなんてお美しいのでせう。」「いゝお召でございますこと。」といふぐらゐなものである。話す方でも拙く、受ける方でも拙いのが、一般日本婦人、殊に一部のお上品ぶる人に多いやうである。何をいつても、「まあ、さやうでご

ざいますか。」「ほんとにねえ。」だけでは、全く張合がない。すべて自分の意見を輕々しく發表して、人に自慢らしく思はれたり、また、ぼろを出してはならないといふ、所謂「いゝ子」にならうとするずるい考から、當らず觸らずにしておく仕方は、最も賢い方法かも知れないけれども、婦人の進歩・向上の立場から見れば、これはよほど損なことである。平生家に閉ぢ籠つてゐる人が、たま〳〵多人數の中に出たなら、各〻自分の説を發表して、知識や經驗の交換をすれば、きつと誰もが何か得るところがあるはずである。

種々の形式に囚はれた交際の上では、まだ仕方がないとして、同じ學校で一つの教室に机を並べて學んだ人々の同級會などのやうな集合に於ても、面白い話はなく、「誰は何人の

子持になつた。」の、「誰さんは仕合だ。」のとか、「あの方は不仕合だ。」とか、漫然とした他人の噂話に時を費してしまふのは、大變に物足りない。

それにも増して驚くことは、この頃實見した一例であるが、母が子に對してさへ甚だ寡言なことである。最近私が小旅行をした時、汽車の中で、子供づれの夫人を多く見かけたが、汽車の窓の外には、自然の景色が無限の話題を提供してゐるのに、終始殆ど沈默して、所謂お上品に構へてゐる人が多かつた。子供に實物教授を施す絶好の機會に於てさへ、子供に何事かを教へ、若しくは子供とともに研究しようといふ意志のないのが、婦人の一般の氣風である。この氣風がすべての改善・進歩を妨げるのである。

優れた實質を有つ婦人が、社會に對して相當の要求をするのは勿論當然なことだらう。しかし、私達一般の婦人は、せめて差當つて日常の話題を豐富にするぐらゐのところから出立せねばならない。

一六　一萬と箱王

頃は人皇第八十一代安德天皇の養和元年、新玉の年立返り、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮、箱王は母の膝の上にたはぶれながら、「いかに、母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛はいづくにましますぞや。往きて拜みたてまつらばや。母御前、いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたる來しかたも、今更思ひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母泣く〳〵のたまひけるは、「あの曾我殿こそおのれらが父にてあれ。」と、心強くかたらひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、「父御前は、まことやらん、『狩場より歸り給ふ道にて、工藤一藤とやらんに射られ、死に給ひぬ。』と兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて、鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。われらをも殺さんとや思ふらん。われらがこの里に在りと知らでや過ぐらん。」など、おとなしく語りければ、母より始めて、女房たちまで皆袖をぞ絞りける。

かくて、夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がね

養和元年（一八四一年）

一萬・箱王
工藤家次
祐家
祐繼
祐親
祐泰
祐成（一萬）
時致（箱王）
祐經

母名は滿江、祐泰の死後祐信に再嫁した。
曾我殿太郎祐信。
工藤一藤。即ち祐經。
鎌倉殿源頼朝。
この里相模國足柄下郡曾我中村。

の南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは「あれ見給へ、箱王殿、空を飛ぶつばさも、皆別のつばさぞまじへざりける。五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらん。物いはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬことこそ悲しけれ。われらが父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、

曾我兄弟（繪本曾我物語）

河津殿　かわづ三郎祐泰。

弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。われらより幼きものにても、馬鞍・弓矢をもて物を射ありくことの羨しさよ。これらのことども思ひ續くれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。」とて、袖に顔を差入れてさめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あな、あさまし、人もこそ聞け。いかに和上薗達、夜も更けぬるに、さやうにてはおはするぞ。とく〳〵入らせ給へ。」と怖ろしげにいひければ、二人のものは門外へ逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に内に入りけり。

或時、兄弟は竹の小弓に薄矧の小矢を取添へて、遠侍に出でてあそびけるが、明障子のありけるに、二人立向ひ、あなたこ

なたへ射とほして、一萬、箱王に申しけるは、「われらもいつか成長し、和殿十三、われは十五にだにもなるならば、いかならん野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなん。和殿も弓よく射習ひ給へ、われも射習はん。弓矢は男の一の能にあるなるぞ。」といひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと人人思ひけり。

曾我兄弟の墓

一萬が乳母このよしを聞き知りて、大きに驚きて、母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子供を呼びよせ、泣く泣く語られけるは、「まことか、おのれらがさも怖ろしき謀叛を起さんと議しあふなるは。もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれらが祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館において失はれ給ひぬ。おのれらかゝる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。その時千たび百たび悲しむともかなふべきか。そのうへ、汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿なげき申してとどまりたり。その故は、鎌倉殿石橋山の合戰に打負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と二人心をあはせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされしそ

伊東入道　名は祐親。千鶴御前の母は祐親の女。

松河が淵　伊豆國田方郡伊東にある

石橋山の合戰　治承四年八月十九日（一八四〇）石橋山相模國足柄下郡。

土肥の杉山　土肥の山谷、石橋山の南

梶原景時　頼朝の寵臣。

の御恩を皆返しまゐらせて、『二人の幼きものどもを助けて給はらん。』と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、『それほどの志ならば、二人の子供祐信に預くるぞ。』と仰せられけるゆゑにこそ、汝等も安穩にて今まで希有の命を保ちたるぞ。それにつきても、曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡すべきか。鳥類・畜類にても恩を知るとこそ聞け、況や汝等人倫に於てをや。しかるを却つて曾我殿に歎を與へんこと、かへすがへすも口惜しかるべし。その恩を報ぜんと思はば、速に謀叛をとゞむべし。」と、口說きたてて誡められければ、二人の子供目と目とを見合せ、顏打赤めて立ちにけり。それより後は、人の聞かぬところにては內々談議しけれども、人目に顯れては語り合ふこともなし。母も內々怖ろし

きものどもの心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせんとぞ思はれける。（曾我物語）

一七　かりがね

島崎藤村

さもあらばあれ鶯の
たくみの奧をつくさねど
またも深山のこまぎれ
しらべのほどは歌もねど
まづかざりなき一聲を
涙をさそふ秋乃こゑ
長きなげきをもらすとも

島崎藤村、長野縣の人、明治五年生、文學者。名は春樹。

なほあまりある悲みを
移せよしなきなれが身の
なげのく秋をよぶ聲の
荒きひゞき城もたらして
人のこゝろをみだすらん

ほゝ秋の日はさびしさを
小鹿は知るかぎりのむ
すゞ志き風はおどろきて
羽袖もいとゞひやゝかに
もゝちの鳥のむきを出で
うかべる雲に慣るゝなな

菊より落つる花びらは
なほ啄むにまかせたり
時雨に染むるもみぢばも
なれが翳をふまるせたり
聲をはなちてさけぶとも
誰かいましをとゞむべき

星もあしたに冷かに
露はゆふべにいと白し
風にしたがふ桐の葉は
枝より別れて散るごとく
御空の海にうちぶきて

立歸り鳴け秋のかりがね

一八　ベルリンから

徳富健次郎

隨分永らく御無沙汰しました。私どもは去る六月中旬エ*ルサレムを立ち、その下旬にポ*ートサイドで講和條約調印の報に接しました。それからイタリーに二月、パリに二週間、スウィスに二週間、スウィスからドイツに入り、ベルリンに來て、もはや二週間になります。小さなホテルの、裏二階に二週間の逗留は案外氣樂で、今まで經て來た、どこよりも家庭的な感じがします。しかし、明日はそのベルリンにも別れて、ベルギーを經て、パリに歸り、それからそろ〳〵イギリスに渡るつもりです。

Jerusalem　Port Said　Italy　Paris　Deutschland　Berlin　Hotel　Swiss　Belgium　English

六月　大正八年。
エルサレム　パレスタインの都會、キリストの墳墓がある。
ポートサイド　スエズ運河の北口、地中海岸の港。

ヤソの郷里のナ*ザレ及びその附近には、かなりドイツ人が土着してゐます。壯年の男達は皆兵士になつたり捕虜になつたりして、老人や女子供ばかりが淋しく暮してゐます。ふとした縁から、その一二家族と懇意になりました。皆ドイツの前途について懸念してゐます。私は次のやうな話を彼等にしました。

「私は東*京の郊外に住んでゐますが、あの邊では、寒中になると、百姓がよく麥踏みをやります。十月末に蒔いた大麥・小麥が緑芽をふいて二寸にもなると、ひどい霜が來ます、麥は根上りになります。そこで、百姓が喞煙管で煩冠り、後手を組んで、ひよい〳〵と麥を踏みつけていきます。踏めば踏むほど麥の株は勁くなり、太くなり、そして來年

Jesus　Nazareth

ナザレ　エルサレムの北十七哩、キリストの幼時の居住地。

東京の郊外　東京府北多摩郡千歳村大字粕谷。

の實入りが多くなります。踏まないと、ひよろ〳〵根上りになつて、實入りが少いのです。自然はいつもこの筆法を用ひます。五十年前には*ドイツがフランス France を踏みました。今度はそのフランスがイギリス・アメリカ America・イタリーに日本まで連れて來て、一所懸命骨折つてドイツを踏みました。ドイツの前途は多望です。」

ウィルヘルム二世

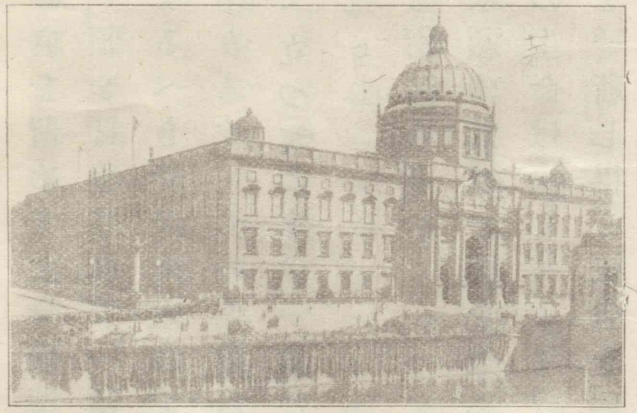
私は今、ドイツの眞中に來て、少しも前說を改める必要を認めません。ドイツの前途は正に多望です。その田舍を通れば、野良には女が多く働き、その都會には、片手・一本足の乞食が多く、卵一箇が二*マーク Mark もして、見るほどの人間は皆ま

五十年前　西暦千八百七十年の普佛戰爭をいふ。

今度　世界大戰をいふ。

マーク　我が國の四十七錢餘に當る、たゝし戰後は非常に下落した。

だ營養不良な沈痛な顏をしてゐます。カイゼル Kaiser の寫眞を麗々と掲げてゐる家もあれば、街頭で革命の繪葉書を賣るものもあり、富籤の廣告などが眼に着き、このちら〳〵雪の寒空の下に、三百万の人の子がうよ〳〵と芋の子を洗ふやうにしてゐるのを見ると、ドイツはどうなるかとの懸念も出るが、それは杞憂に過ぎません。私は踏まれた麥の前途を疑ひません。却つて踏んだ仲間の上が氣にかゝります。先日こゝの丸の内に往つて見ま


戰前のドイツ宮殿

カイゼル　ドイツ皇帝のこと、こゝはウィルヘルム二世を指す。

した。主のカイゼルはオランダ(Holland)に逃げ失せて、空宮になつてゐます。皇居の側門は民の怒の痕を留めて、大分破壞されてゐます。紋章の双頭の鷲は一頭を打落されて、一頭になつてゐます。ドイツの心の定まるべき時が來たのです。この皇居と直角に大きな寺院があります。その正面入口の上に、ヤソの像が右の手を擧げて立つてゐます。像の右に次の言葉が刻してあります。

「見よ、我は世の終まで、常に爾曹と偕にあり。」

カイゼルは逃げ失せもしませう、双頭の鷲は一頭を失ふこともありませう。しかし、ドイツの生命は決してドイツを離れません。ドイツは、その生命を一新し得る機會を與へられたことについて、骨折つた百姓達に眞實お禮をいはねばなりません。

一九　ポンペイ物語

濱田青陵

ポンペイ(Pompeii)の遺跡發掘後、ギリシャ(Graecia)・イタリーの各地で色々の遺跡が掘り出され、アフリカ(Africa)の北岸ではチムガッド(Timgad)のやうな遺跡が砂漠の中から出て來たにも拘らず、ポンペイの遺跡がやはり世界最大の一奇物として好評を博してゐるのは、噴火で埋沒したといふ悲劇と結びついてゐるからだらう。

紀元七十九年八月二十三日から二十六日に亘るヴェスヴィオ(Vesuvio)山の噴火が、一朝にしてナポリ(Napoli)灣頭のローマ(Rome)時代の小市街を火山礫で鑵詰狀態にして、これを十九世紀まで保存したのは、神明の不可思議な作業とでもいはうか。

濱田青陵、大名は耕作、阪府の人、考古學者、文學博士、京都帝國大學教授。

チムガッド　アフリカにおけるローマ時代の市址。

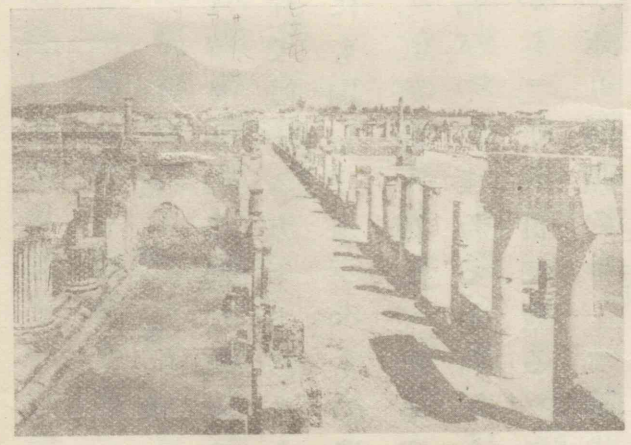
ヴェスヴィオ　Vesvius. ナポリ灣東岸の活火山、海拔四〇二一〇呎。

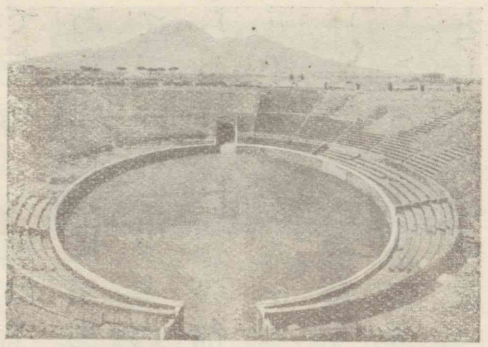
ポンペイ見物は、ナポリから電車或は汽車で日歸りで出來る。なんといつても、今まで發掘された部分は全市の半分ぐらゐで、長さ四五町、幅三四町の小さい町であるから、我が輩のやうに、郵便配達の如く各戸を訪ねても、二三日かゝれば見盡される。

まづ普通の見物客なら、圓劇場・墓道、それから市内の中心フォラム（Forum）・三角フォラム・浴場、ヴェチイ（Vetti）の家、その他數軒と小博物館とを見れば澤山、珍しい遺物はナポリの博物館で見ればいゝ。

また婦人や足弱の人のためには、擔ぎ椅子のやうなものがある。案内者は各國の言語を操るし、なんの不便もないが、なか〳〵五月蠅い奴なので閉口する。我が輩もしたゝか彼等に附きまとはれたが、「どこの言葉でも話す。」といふから、「日本語はどうぢや。」といつたら、頭を搔いて遁げていつた。

誰でも見たがるのは人間の死骸であるが、これは今日完全に殘つてゐるのは甚だ少い。ポンペイの小博物館に、二三體硝子箱に入れてある男女及び犬の死骸がある。人間のは箱の下からも見られるやうに道が造つてあるので、

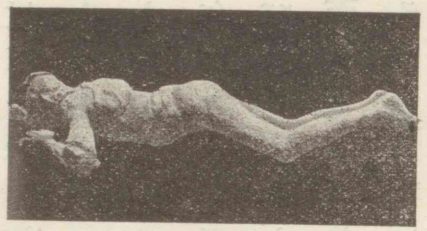

ポンペイの廢墟


ポンペイの圓劇場

ナポリ　ネープルス。

好奇心を滿足させることが出來る。この外、フィルムス(Firms)の家には、主人夫妻・二兒・二僕の死骸をそのまゝ現場に保存してある。大抵は手を以て目を被ひ、斷末魔の苦みを現してゐる悲慘な姿である。元來ポンペイの人口は、多く見積つて二万ばかり、その中、今まで死體の發見されたのが二千ぐらゐで、未發掘の部分から將來發見されるものを合せても、五千を超えないらしい。つまり、墳火の騷で大抵の人は逃げ出したが、礫灰を降らせるぐらゐで、案外急なこともないところから、慾張連中は再び家へ歸つて、荷物でも取出さうとしたため、次にやつて來た毒瓦斯(ヴィカス)のために死んだものらしい。尤も慾張でなくて、他の事情で遁げおほせなかつた人もあらう。

それから、此等の博物館などにある死體の、白く、肉體の形まで存してゐるのは、石膏で取つた復原であつて、その中に骨がはひつてゐるのである。元來、灰や砂礫の間に埋れた人體の肉は段々腐つてしまふのに、外面の砂土がまづ以て堅くなつたので、人間の形をした空洞が出來る。この空洞は丁度石膏型の雌型であるが、發掘の際、これを破壞しないでうまく發見することは困難である。時々都合よく發見されて、それに石膏を注ぎこんだのが即ち我々の見るところの死體である。



人體の化石

市街の家々は皆屋根拔けであるが、壁畫や、モザイク(Mosaic)*や、その

*モザイク　寄木細工。

他のものはよく殘つてゐる。色々の彫刻や家具の類はナポリに移されてあるから、現場には多く見られない。多くの家の中で最も見るべきものはヴェチイの家で、その壁畫はポンペイ第一の傑作である。この外、悲劇詩人の家、ファウンの家、サルストの家、外科醫の家など、一々擧げるに遑がないが、銀婚式の家といふのがある。これは千八百九十二年、イタリー王及び王后の銀婚式を祝賀するため、両陛下及び丁度賓客として來られたドイツ皇帝及び皇后両陛下の面前で發掘してお目にかけたので、さう命名されたのである。尤も初に一度掘つておいたのを、再び態とらしく掘り出したといふことである。

*フィオレリー以來の發掘法は舊式でよくないので、近來はナポリ博物館長監督の下に、新しい方法で、謂はゆる「新發掘」が行はれてゐる。これは非常に精密に發掘して、一々發見物を現場に保存する方法である。この新發掘以來、我々は更に新しい多くの事實を知ることが出來るやうになつたのである。

Fiorelli

フィオレリー　イタリーの古物學者、ポンペイを發掘した。

二〇　林子平の墓

菊池松堂

時艱にして偉人を憶ふ。予仙臺に來りて、そゞろに寛*政の先覺者林子平を追慕するの情に耐へず、獨りその墓を訪ふ。墓は仙臺驛を北に距る二十八町なる龍*雲院の境内に在り。門前の荒物屋にて香華を求め、院に到りて案内を乞ふ。本堂の右方に約一坪建の木造祠あり。扉は鐵の錠にて固く

菊池松堂　名は茂、東京市の人、萬朝報記者。

寛政　光格天皇の年號。（一七八九―一八〇一）

林子平　名は友直、仙臺の人、德川末期の志士、寛政四年（一七九二）歿、年五十。

龍雲院　曹洞宗。

鎖さる。案内の人錠を解き扉を開く。中に一基の墓石あり、高さ二尺を越えず。正面に「六無齋友直居士」と勒し、右に「寛政五癸丑歳六月廿一日」、左に「行年五拾六歳」と刻す。これ子平の墓なり。

林子平墓碑

携へたる香華を手向け、合掌して壽量偈を諷誦し、冥福を祈りて追慕の情を遣る。墓祠の左右に二大碑あり。右方の碑には、齋藤竹堂の林子平傳と、伊藤博文の附記を刻す。博文内務卿たりし時、明治十二年十一月奥羽を巡視し、仙臺を過り、子平の墓を訪ひしに、荒徑・寒草の間に埋れ、石麁にして小、僅かにその姓名を刻せるのみ。しかも字

齋藤竹堂　名は磐、仙臺の人、熈川末期の儒者。

伊藤博文　山口縣の人、公爵、明治時代の政治家、明治四十二年歳、年六十九。

細にして苔蝕、殆ど辨ずべからざるを見て、慨然として自ら碑を樹て、竹堂の傳後に記せるもの即ちこの碑文なり。左方の碑には、大槻磐溪の撰にかゝる「先哲林子平碑」と題せる文を刻せり。

林子平

本堂の一室に子平の遺物あり、床にはその位牌及び木像を安置す。木像の左右に木塑の仁王尊阿吽二體あり。こは子平が獄中刀を執つて自ら刻塑せるものにして、子平が憂忿の氣躍々と現れ、卓拔遒勁、精氣人を襲ふものあり。机上に子平の肉筆「三國通覽」木版「海國兵談」あり。楣に子平の書簡の扁額あり。壁に朝鮮・臺灣・樺太・日本本土の子

大槻磐溪　名は清崇、仙臺藩の儒者、明治十一年歳、年七十八。

平の作圖あり、子平の肉筆にかゝるオランダ人の畫像あり。Holland また扁額に文武兼備の大學を起さんとして自ら作圖せる大學設計圖あり。

救ふべき力のかひもなか空の
惠にもれて死ぬぞくやしき

と記せる獄中辭世の歌あり。

子平夙に蘭學を學び、殊に地理・博物に通ず。海國兵談・三國通覽の外、諸藥異言はその名著たり。天明・寛政の際、天下事なく、上下恬淵、また海防の何たるかを知らず。子平獨り卓

親もなし妻なし子なし板木なし
かねもなければ死にたくもなし

六無齋

林子平筆蹟

天明　光格天皇の年號（一七八一―一八〇一）

見、海外の形勢を察し、海防の急を說き、文武兼備の有爲なる青年の敎養を志し、大學を起さんとす。幕府の小人輩徒に權勢に憧れ、安逸を貪り、千古の卓見家子平を目して狂妄者となし、仙臺藩に命じて禁錮せしむ。世人また高山彦九郎・蒲生君平と併せて、「寛政の三奇人」と冷笑するのみ。

子平の禁錮に遇ひしは寛政四年五月十五日にして、海國兵談の鏤板もまた毀沒せらる。自ら嘲りて、

親もなし妻なし子なし板木なし
かねもなければ死にたくもなし

の歌を詠じ、六無齋と號し、一室に端坐して、足また戸庭を出でず。

子平死して五十年後、始めて赦命あり、漸く墓石を樹つるを

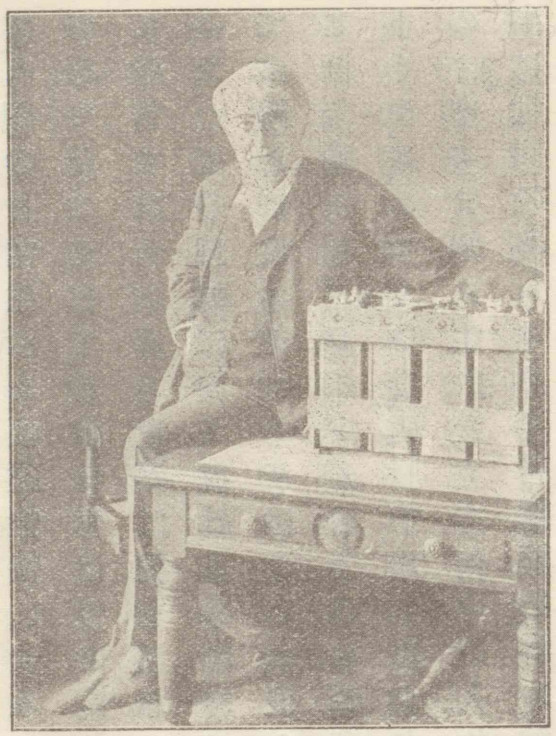
高山彦九郎　名は正之、上野國の人、德川末期の志士、寛政五年（一七九三）歿、年四十四。

蒲生君平　名は秀實、下野國の人、德川末期の志士、文化七年（一八一〇）歿、年四十六（四十七ともいふ）。

許さる。しかも、その高さ二尺を超えず。予今親しく子平の墓を訪ひ、またその遺品を見て、感慨に堪へず。嗚呼、先憂の士世俗の容るゝところとならず、轗軻落魄、空しく恨を呑んで死するもの、一に何ぞ此の如くなるや。

二一　發明界の偉人

米國は今日まで隨分多くの世界知名の政治家や實業家を出した。そして、それらの人々は今日の米國を作るべく有らゆる努力を續けた。しかし、建國以來米國の有つたものの中で、トーマス、エヂソン（Thomas Edison）ほど偉大なものは少い。否、單に米國ばかりでなく、世界の有つたものの最も大きいものの一つである。



トーマス、エヂソン

エヂソンは米國を科學的に偉大にした。同時に世界を電氣化した。彼は米國の一市民であるが、その事業は世界的であり人類的である。政治家や實業家は、何よりも先に、自己及び自國の利益を圖り利權を獲ようとするけれども、彼はかゝる褊狹な考を有してゐなかつた。たゞ科學的發明によつて、各國民に對して同樣の便益愉快を與へよ

うと心掛けた。實に從來知られなかつた自然力を利用して、人類の日常生活を便益・愉快にすることは、彼の一大使命であつた。そして、この使命は彼の驚くべき創造力によつて遂行された。即ち世界は彼を通じて電力應用の福音を得た。この意味に於て、彼は世界のエヂソンであつて、決して米國だけのエヂソンではない。彼の所有者たる米國が、これを國民的プライド(Pride)とするのも無理はない。

トーマス、エヂソンは、西暦千八百四十七年二月一日に、米國のオハイオ(Ohio)*州に生れた立志傳中の人物で、列車ボーイ(Boy)を振出に、世間のあらゆる辛苦艱難を嘗め、遂に幾多の世界的大發明を成就した。今日活動寫眞を知らないものはないやうに、またエヂソンの名を知らないものもなからう。恐ら

*オハイオ州　アメリカ合衆國の中央北部。

く、エヂソンほど世界にその名を知られてゐるものは少からう。ひとり米國だけでなく、世界は彼の偉業を德として、知ると知らぬとの別なく、彼に對して等しく感謝の意を表してゐる。

彼の事業は國家の區別や人種の相違を超越して、全く世界的である。若し彼の發明がなかつたならば、世界はいかに日常生活の不便・不快を感じるか測り知れない。彼は或點まで自然を征服し、そして電力を日用化した。彼の發明中で最も世間に知られてゐるのは、蓄音機・電話機・白熱電燈・電球・擴聲器(メガホン)(Megaphone)・活動寫眞機などであるが、この外にも、アルカリ(Alkali)蓄電池・磁氣分擴器を始め、手押車の改良など、殆ど數へきれないほどある。中央政府に登録された專賣特許だけでも、千

二百種類を越えてゐるのを見ても、その一斑を察知することが出來る。

それぱかりでなく、彼は世界戰爭中更に化學藥品の製造を思ひ立ち、化學の研究に沒頭した結果、軍需品として缺くことの出來ないアニリン油(Anilin)・アセチリン(Acetylene)・ベンゾル液(Benzol)・ナフタリン(Naphthalin)などを製出した。此等がどれほど有効に米國海軍に使用されたか、また米國海軍省がいかに彼を重用したかは、當時の海軍卿*が彼を海軍諮議局長に起用したのを見ても解る。實に驚くべき頭腦の所有者ではないか。

若し世界に偉人と名づけるべきものがあるとすれば、トーマス、エヂソンは確かにその主な一人である。彼は米國を益すると同時に世界をも益した。同じ世界的事業でも、彼

*海軍卿　ダニエル。

の事業は、政治家や實業家のそれと違ひ、一黨・一派乃至一國・一人種の興廢だけを念としないところに永久の價値がある。汽船の發明者フルトン*(Fulton)は、エヂソンの世界的偉業によつて、精神的にも物質的にも一大光彩を加へた。第二のリンカーン*(Lincoln)は將來或はまた出るかも知れないが、米國は果して第二のトーマス、エヂソンを見ることが出來るだらうか。吾人は日本國民の名を以て、彼の偉業に對して、深い感謝の意を表するのである。

二二　蓄音機

吉村　冬彥

或年の十月に、私は妻を失つた。やがて襲つて來た冬は、たださへ佗しい我が家を、更に一層佗しくした。大勢の子供

フルトン　米國の人。(1765—1815)

リンカーン　北米合衆國第十六代の大統領。(1809—1865)

吉村冬彥　理學博士寺田寅彥の雅號、東京帝國大學教授。

をかゝへて、家内中の世話をやく心忙しい淋しさの内に年が暮れて、正月になつた。年頭の儀式は廢しても、春はやはりどこか春らしくて、突きつまつたやうな心にも、いくらかのゆとりが出來た。三箇日の過ぎた或日、親類へいつたら、座敷に蓄音機があつた。正月の客あしらひかたゞ〳〵、どこからか借りて來たので、私が來たら聞かせようといつて待つてゐたとのことだつた。そこで、まづお伽歌劇「ドンブラコ」といふのを聞かされた。

この器械は所謂無喇叭の小形のもので、音が弱いから騷がしくはないが、音色の再現はあまり完全でなく、それに何か物を摩擦するやうな雜音が可なり耳障りだつた。それにも拘らず、私の心はその時不思議にこのお伽歌劇の音樂に

ドンブラコ　桃太郎の昔噺を仕組んだもの。

引きつけられていつた。十分には聞き取り兼ねる歌詞はどうであつても、歌ふ人の巧拙はどうであつても、そんなことに頓着なく、私の胸の中には、美しい「子供の世界」の幻像が描かれた。聞いてゐる中、なんといふことなしに、ひとりでに涙が出て來た。永い間自分の眼の奥に固く凝りついてゐたものが、初めて解けて流れて出るやうな氣もした。

ふと、私は、宅でも一つ子供に蓄音機を買つてやらうと思ひついた。そして、寒い雨の日に、銀座に出かけて、器械と「ドンブラコ」のレコードとを求めた。子供達の喜びは一通りでなかつた。品物の屆く時刻を待ち兼ねて、門の外へ幾度か見に出たりした。

その夜の我が家は、いつになく賑はつた。なんとなしに子

銀座　東京市京橋區。

供達の心を押しつけてゐた暗い影が、少くとも、この夜は、どこかへいつてしまつたやうな氣がした。疲れた後で快く眠つてゐる子供達の顔を見比べながら、雨戸にしぶく雨の音を聞いてゐる中に、いつの間にか、また説明の出來ない涙が流れた。

當分の間は、毎日子供達から蓄音機を〳〵と迫られた。子供達はもうすつかり歌詞や旋律を覺えてしまつて、朝、目が覺めると、床の中から、あちらでもこちらでも、それを歌ふのだつた。

小學生のよく歌ふやうな唱歌のレコードも買つて來たが、それらはとても聞かれない妙な不愉快なものだつた。あいふ歌でも、ちやんとした聲樂家の歌つたのなら、きつと

面白いだらうと思はれるが、普通のレコードのやうに、妙な癖のあるませた子供の唱歌は、私にはどうしても聞き苦しい。さうかといつて、邦樂の大部分や俗曲の類は、子供達にあまり親しませたくなし、落語などは隣でやつてゐるのを聞くだけでも、私は頭が痛くなるやうだつた。それで、結局私のレコード箱には、*ヴィクター(Victor)の譜が大部分を占めるやうになつた。

妙なもので、初の中は「牛若丸」や「兎と亀」などを喜んだ子供達も、ぢきに、さういふものよりは、やはり西洋の名高い曲のいいレコードを喜ぶやうになつた。今日は*「アンヴィル、コーラス」(Anvil chorus)をやれとか、*カルソー(Caruso)の*「アヴェ、マリヤ」(Ave Maria)をやれとか、色々の註文を受けるやうになつた。

ヴィクター　ヴィクター會社。

アンヴィル、コーラス　オペラトロバドーレの第二幕一場の一節。

カルソー　イタリーの聲樂家。(1874—1922)

アヴェマリヤ　シューベルトの作曲にかゝるもの。

二三　二宮翁夜話

福住正兄

川久保民次郎といふものあり、二宮翁の親戚なれども、貧にして翁の僕たり。國に歸らんとして暇を乞ふ。翁曰く、『それ、空腹なる時、他に行きて、『一飯を賜はれ。予庭を掃かん。』といふとも、決して一飯を振舞ふものあるべからず。空腹を怺へて、まづ庭を掃かば、或は一飯にありつくことあるべし。これ己を捨てて人に隨ふ道にして、百事窮してもまた通ずべき道なり。我若年始めて家を持ちし時、一枚の鍬損じたり。隣家に行きて、『鍬を貸し給はれ。』といひしに、隣翁曰く、『今この畑を耕し、菜を蒔かんとするところなり。蒔き終らざれば貸しがたし。』といへり。『我家に歸りても、別に爲すべき

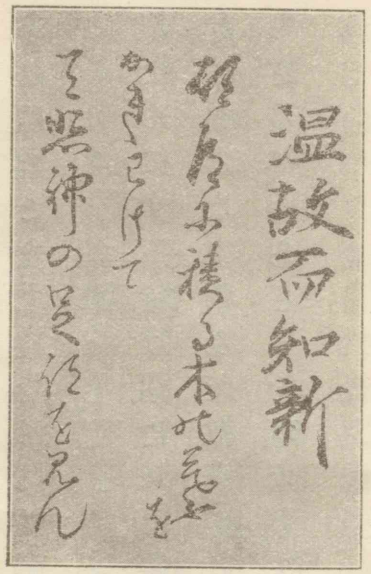
福住正兄（ふくずみまさえ）　箱根湯本の人、二宮尊德の高弟、明治二十五年歿、年六十九。

二宮翁　名は金次郎、尊德といふ、相模國の人、德川末期の經濟家、安政三年（一八五六）歿、年七十。

業なし、よりて、この畑を耕して進ずべし。』といひて、耕し、『菜の種を出されよ。序に蒔きて進ぜん。』といひて、蒔きしに、隣翁喜びて鍬を貸し、なほ曰く、『鍬に限らず、何にても差支のことあらば、遠慮なく申されよ、必ず用立つべし。』といひしことありき。かくの如くすれば、百事差支なきものなり。汝、國に歸り、新に一家を持たば、必ずこの心得あるべし。また、汝今、壯年なり。終夜いねざるも障なかるべし。夜夜いぬる暇を勵まし勤めて、草鞋一足或は二足を作り、明日開拓場に持ち出し、草鞋の切れ破れたるものに與へんに、受

くる人禮せざらんとも、もといぬる暇にて作りたるなれば、その分なり。禮をいふ人あれば、それだけの德なり。また一錢・半錢を以て應ずるものあれば、これまた一きはの益なり。よくこの理を感銘し、連日怠らずば、何ぞ志の貫かざる理あらんや。我幼少の時の勤、この外にあらず。肝に銘じて忘るべからず。」と。

翁曰く、「世の中は今事なしといへども、時には變なき能はず。これ恐るべきの第一なり。變ありといへども、これを補ふ道あれば、變なきに等し。變ありて補ふこと能はざれば、大變に至る。古語に、『三年の貯蓄なきは國にあらず。』といへり。兵隊ありといへども、武具・軍用備はらざればすべきやうなし。家も亦然り。それ萬づのこと餘裕なければ、家を保つこと能はず。然るを況や家・天下をや。人は予が教を儉約を專らとするものといへど、儉約を專らとするにあらず、變に備へんがためなり。人は予が道を積財を務むるものといへど、積財を務むるにあらず、人を救ひ世を開かんがためなり。」と。



二宮尊德筆蹟

翁曰く、「禍福といふものは二つあるにあらず、元來一つなり。近く譬ふれば、庖丁を以て大根を切るときは福なり、指を切るときは禍なり。たゞ物を切ると指を切るとの違のみ。それ庖丁は一なり。而して指を切れば禍とし、大根を切れば福とす。されば禍

温故而知新
故道に積る木の葉をかきわけて天照神の足跡を見ん

福といふも人事の私にあらずや。水もまた然り。畔を立てて引けば、田地を肥して福なり、畔なくして引けば、肥土流れて田地痩せ、その禍いふべからず。それ水は一なり。畔あれば福となり、畔なければ禍となる。富は人の欲するところなり。然れども、己がためにする時は禍これに隨ひ、世のためにする時は福これに伴ふ。財寶もまた然り。散ずれば福となり、積んで散ぜざれば禍となる。これ人々の知らざるべからざる道理なり。」と。

二四　殿中の刃傷

村上浪六

元禄十四年三月十四日、大禮の終として、白書院に將軍勅答の式日、閣老・有司の面々はもとより、譜代・外樣あらゆる諸侯

村上浪六　名は信、堺市の人、小説家。

元禄　東山天皇の年號。（一六八一―一七〇四）

の總登城は巳の上刻。千代田の春に武家の莊嚴を極め、関東の聲望、柳營の威儀、廣々たる殿中、今日を晴と出仕の席に從ひ順に就いて、勅使・院使の御登營を今か〳〵と待ち受けぬ。別けて今日は公武周旋の典禮・作法に出頭第一の老功たる吉良上野介、松の御廊下口を控へし一室の正面に着座して、我なくばと四方を見廻す體。

鬼畜に總身の肉を食まるゝ如き心地しながらも、遁るゝ道なき淺野内匠頭、恐る〳〵その前に辷り出づれば、じろりと見て、

「ほゝう、昨日の問合に、『長は無用。』と申した上野の一言、今日ばかりは神妙に守られて、烏帽子・大紋を召されたな。万事その通りに致さるれば、この程より度々の御失體もな

白書院　江戸城居間の名、上段下段の二間がある。

吉良上野介　名は義央、德川幕府の高家。

淺野内匠頭　名は長矩、播州赤穗城主。

いはずぢやに。」

「お言葉謹んで有難く承ります。就きまして、内匠なほ一應差當りお指圖を。」

「なに、差當つての指圖、いかやうの儀でござるの。」

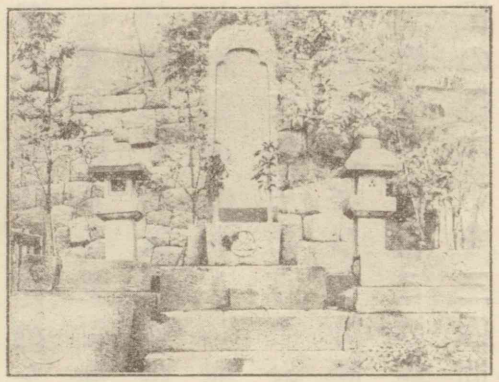
「今日の御儀式に、傳奏方御着の砌、内匠のお役目として、お玄関の式臺にお迎へ申し上げませうや、たゞし御式臺下にてお迎へ申し上げませうや、お指圖下さりまするやう。」

上野介さも訝しげの顔色。

「これは以ての外怪しからぬ。内匠殿お場處柄も辨へず、今日この老人を愚弄せらるゝか。」

あまりの案外に、内匠頭はつと驚きの面を揚ぐれば、その面上に冷笑の聲を含みて浴せかけ、

「この上野を愚弄するでなく、若し眞實この場合に差迫つて、さほどのことも御存じないとすれば、上を欺いて今回の大役を申し受けられたも同然、指圖も指南も事によりけり。五万三千石の大名、それで御用が勤まると思はるゝか。疎忽千万。」



淺野長矩の墓

さらぬも堪へがたき連日の遺恨に、夜の目も合はず無念の涙を呑み、たださへ忍びがたき鬱憤に、頬は痩せ、顔は蒼ざめながら、重ねがゝの恥辱も御奉公大切の一念に、元來の癇癖・短氣を抑へ來りし今また五万三千石の祿盜人といはぬばかりに辱められし内匠

*五万二千石　正保二年七月長矩の父淺野長直が赤穂五万三千五百石に封じられた。

頭、そのまゝ伏して座を動かねど、ぴたりと支へし両手は我を忘れて拳を握り、頭を垂れし烏帽子は次第に打震ひ、鷹の羽の大紋は袖に漣を寄するが如し。さもこそと心地よげに座を起ちし上野介。

をりしも、*將軍家の生母たる*桂昌院の御使番として、大奥より急ぎ足に來りし梶川與三兵衛、かくとは知らず、内匠頭に向つて御用の打合せ。

「これは幸ひ淺野殿、上様御勅答の御儀式相濟みましたる節は、その旨この梶川までお知らせ下されまするやう。」

松の御廊下を三四間の彼方まで去りし上野介、俄に振返りて立戻りぬ。

「梶川殿、なんの御用かは存ぜぬが、桂昌院様よりとあらば、

*將軍　德川綱吉。
*桂昌院　家光の中臈、本庄宗正の女。

上野承らう。そこに居られる内匠殿では、作法万端一向お解りにならぬ御人、心元ない。ありや近頃若耄碌せられたげぢや。」

伏したる内匠頭、むくりと起ち上るや否や、*大原實盛の小刀を拔く手も見せず、電光石火の勢、帛を裂くが如き癇癖の一聲、

「おのれッ。」

躍りかゝつて上野の面上眞二つと打ちこみしが、あまりの悲憤に氣は焦りて拳は伸びたり。恨の切先は流れて、がちりと烏帽子の鐵輪。

「無念。」

と蹈みこんで、仆れし上を二の太刀に斫り下げし後より、梶

*大原實盛　古刀の鍛工、年代・住處ともに不詳。

川與三兵衛むずと羽掻締に組みつきぬ。

「お場處柄でござるぞ、乱心々々。」

内匠頭遁げ行く敵に血眼を注いで、さながら五臓六腑を絞り出す聲。

「ら、ら、乱心いたさぬ。武士のお情、お慈悲、お慈悲ッ。」

いかに荒れ狂うて振放さんとするも、いかに藻掻いて追はんとするも、梶川與三兵衛は七万騎中に聞えたる六尺有餘の大力無双。あはれ、内匠頭は元來の痩形に連日連夜の疲れ果てし身。看す〳〵眼前に長蛇は逸せり。

殿中は鼎の沸くが如く、上を下への大騒動。

間一髪、吉良上野介は危き命を拾うて、馳せつけし品川豊後守に助けられ、お坊主の肩に掛けられて、高家衆の詰所へ連れこまれしが、日比の權威・傲慢に似合はず、息も絶え〳〵なる老眼に血を浴びて連れ行かるゝ時、「お典醫々々々。」と聲を顫はせながら夢中に唸りし體、あまりの見苦しさと小氣味よさとに、出逢ひし諸侯いづれも微笑を含みぬ。

武運の末、後より梶川與三兵衛の大力に抱き止められ、前より坊主の關久和に太刀の手を搦まれて、かくまでの欝憤も無念も万事こゝに休せし内匠頭、そのまゝ御目付に護られ、蘇鐵の間に引かれて、杉戸の後に据ゑられしが、靜かに鬢の毛を撫であげ衣紋を繕ひし體、「さすがに名家の生れなり。」と、見るもの思はず涙を流しぬ。

二五　鰊の漁期

有島武郎

名家　廣島藩主淺野家を指す。

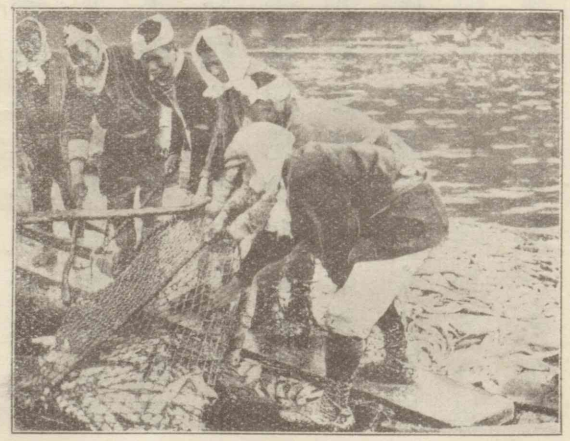
有島武郎　東京市の人、明治十一年生。文學者。

鰊の漁期！　それは北方に住む人の胸にだけしみ〴〵と感じられる懷かしい季節の一つだ。

この季節になると、長く地の上を領してゐた冬が老いる、北風も、雪も、圍炉裏も、綿入も、雪鞋も、等しく老いる。一片の雲のたゝずまひにも、自然の目論見と豫言とに對して人一倍鋭敏な漁夫達の眼は、朝夕の空の模樣が春めいて來たことをまざ〴〵と看て取る。

北西の風が東に廻るにつれて、單色に堅く凍りついてゐた雲が、蒸されるやうにもや〳〵と崩れ出して、淡いながら暖かい色の晴雲に變つていく。朝から風もなく晴れ渡つた午後などに、波打際に出て見ると、やゝ緑色を帶びた青空の遙か遠くの地平線上高く、幔幕を眞一文字に張つたやうな

雪雲の堆積に日が射して、まんべんなく薔薇色に輝いてゐる。なんといふ美妙な麗しい色だらう。冬は彼處まで遠退いていつたのだ。さう思ふと、不幸を突き拔けて幸福に出遇つた人だけの感ずるあの過去に對する寛大な思出が、緩かに濱に立つ人の胸に流れこむ。五箇月間の長い嚴冬を、牛の如く忍耐强く辛抱しぬいた北人の心に、――もう少しでひねくれた根性にさへなり兼ねない北人の心に、――春の約束がほの〴〵と惠深く響き初める。



鰊漁の光景

朝晩の凍み方は大して冬と變らない。濡れた金物がべたべたと糊のやうに指先に粘り着くことは珍しくない。しかし、日が高くなると、流石にどこか寒さにひゞが入る。濱邊は急に景氣づいて、納屋の中からは大釜や締框が擔ぎ出され、ホック船やワク船を蔽うてゐた蓆が取除けられ、旅鳥と一緒に集つて來た漁夫達が、綾を織るやうに、雪の解けた砂濱を行き違つて、目まぐるしい活氣を見せ初める。鱈の漁獲が一先づ終つて、鰊の走りもまだ出て來ない。海に出て働く人達は、この間に少しばかり息をつく暇を見出すのである。

二六　桃源郷伊豆の大島

有島生馬

大島の自然はむしろ單調で、貧弱の感じを免れない。殊に淡水の缺乏と火山灰の地層とが、その感じを深くさせてゐる。しかし、それらを補うてなほ餘りあるものは、その氣候のいゝことである。冬でも四五十度を下らないし、夏でも平均九十度には上らない。この海洋氣候の齎す恩惠が樣樣なことに深く影響して、特殊な雰圍氣を作つてゐるのである、植物にも、人體にも、人事にも。

一例をいへば、「あしたぼ」「たがや」などいふ青々した、いかにも甘さうな牧草が一年中繁茂する。そのため大多數の島民は牛を飼ふ。その結果、內地では見慣れない樣々な構圖が描かれる。或時は農家の裏庭に、或時は山腹の野原に、或時は搾乳場に、晝間はもとより、時としては暗夜に、この優しい

有島生馬名は壬生馬、武郎の弟、明治十五年生、畫家・文學者。

大島伊豆七島中第一次の島、周囲十里二十六町。

目を有する家畜と村人との組合せが見られる。悠長な鳴聲も到る處に聞える。その乳は飲用としては殆ど無代價の有樣であるが、バター(Butter)・煉乳原料・乳糖・カセイン(Casein)等に製されるから、一日二三圓になる。それによつて婦女子は樂々と獨立の生計を營むことが出來る。

大島婦人と牛

牛の影響はこの外にもある。我々は純良な牛乳を得ると同時に、甘い仔牛の生肉をも十分に供給される。その上、東京から來るパン*に新鮮なバターを副へて食ふことが出來る。まづ食物の有樣から

*カセイン　乾酪素。

*パン　ポルトガル語 Pao.

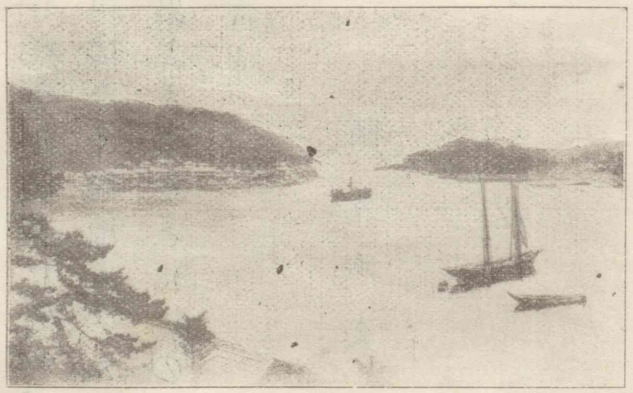
いふと旅客は歐洲の田舍にゐるやうな心持がする。新聞も鎌倉・大磯・熱海邊とは違つて、市內版が屆く。私にとつて一番興味の中心になるものは、やはり島民その ものである。言語・風俗・建築・習慣・生活・產業・社會組織・道德・宗教など、皆一種の特色を有してゐるやうだから、仔細に觀察したら、それ〴〵面白い點があらう。島民の體質と容貌、心狀と氣稟、これらには最も驚かされた。體質は優良、容貌は端麗、心狀は健全・安定、氣稟は快活・敢爲、勞働を愛する。こんな抽象的な言葉を並べただけでは明瞭でないが、ともかく、彼等ぐらゐ樂園の住人に近い人間は他に澤山はなからう。そして、こんな住民を有つてゐること、それが大島の桃源鄕たる最大の理由である。

大島が伊豆・相模・安房の沿海に位しながら、近年まで全く内地の文化と没交渉で、特殊な個人、特殊な社會を作つて來たことは、世界に於ける一奇觀といふことが出來よう。どこの國のどこに、こんな不思議な現象が見られよう。單に交通が不便だつたといふだけでは、とても説明しきれないほど他とは異つてゐる。私にはその原因がはつきり解らなかつた。ところが、私が島にいつた時、或古老から次の話を聞いて、略〻その原因が明かになつたやうに思へた。

それは、舊幕時代に甚だ妙な一つの掟の布かれてゐたことである。この掟は、幕府側からいへば、島民に對する特殊な厚意的保護といふよりも、一種の皮肉な政策に過ぎなかつたのだらう。その掟は、「たとへ難破船・漂流者が寄つて來て

も、若しそれが本土の人であるならば、一物をも與へないですぐ追拂へ。たゞし、利島・新島など所謂伊豆列島の住民だけは例外として、炭水を供給してもよい。」こんな有樣だつたから、交通・貿易・移住等は絶對に嚴禁されてゐたのである。この驚くべき慘酷な鎖國主義の掟のあつたといふ事實で、始めてその生活の原始的なのも、島民が一種固有な發達を遂げたのも、稍明かに理解された。

ところが、近頃では、内地人の製造工場や會社などが出來、隨



大島の波浮港

つて移民も殖え、年々一割以上人口が增加してゐる。この有樣では、數年たゝない中に、忽ち生存競爭が激甚になつて、朴訥な島民は敗北者となり、その幸福は全く內地人のために蹂躪されてしまふだらう。さう思ふと、まことに氣の毒に堪へない。

二七　太陽と春

福田正夫

やるるかく風ぐの
輝いた海とから地上ふのぼる
光つてる畑
光つてる樹
光つてる葉
一つ一つがみんな春の呼吸

絲の春は
樂しげふ搖らぎ
青ぐ〜そふ搖らぎ
生きてる〜と光の中で囁く
黑い土ぐらの下に燃えふぐらら
默つて光を吸ふ

萌えたつ春の碧の空

福田正夫
神奈川縣の人、明治二十六年生、文學者。

忍んだ寒い冬の憂鬱から
南の國の春を解放されて
枯草の間の小さな草の芽
草の色は根の色
あかぐろとうるんだ太陽の愛
溶けるやうな柔らかだ空氣

路を緩かに行く巍夫
その手が光る
その鍬が光る
輝いた地上の光に

溶けて行く愛の世界の春

二八　爆彈下のパリ

吉江孤雁

悲しげな、人を引きこむやうな警笛の響は、今夜もまた聞えて來た。「警報がしましたよ。」といふ疳高い隣室の婦人の聲がしたかと思ふと、電燈が一時に消えてしまつた。と同時に、階段を穴倉へ急ぎ降りる人々の足音が、私の室の上にも下にも騒がしくなつた。

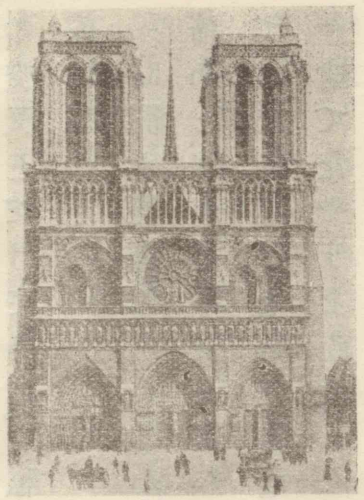
私は今夜はもう穴倉へは降りまいと思ひ切つた。乱雑な騒のあの穴倉へ、呼吸もつまりさうなあの穢い空氣の中へ、そして、細い蠟燭から仄めく火影に怪物の姿のやうに照し出されるあの避難者達の中へ逃げこむことは止めようと

吉江孤雁、長名は喬松、野縣の人、明治十三年生、早稲田大學教授。

思ひきつた。爆彈が落ちても仕方がない。潰されるものならば何處にゐても同じことだらうといふやうな、一種の諦めが私を落着かせた。實際、初は警笛の響く度ごとに穴倉へ逃げて降りるのにも、多少の好奇心があつた。次には煩はしくなりもし疲れもした。終にはそれに馴れもして、私は靜かに一人きり闇の中で部屋に留つてゐた。

最初は寢床に横になつてゐたが、さすがに眠れもしなかつた。手探りで窓まで出て見たが、窓は夕方になると厚い窓掛を卸して、光の戸外に洩れるのを防ぐことになつてゐたので、闇の中でも多少氣臆れがするやうな心持で、その窓掛の端からそつと戸外を覗いて見た。

空全體が一つの響だつた。飛行機の唸りが眞黑な空に漲つて、時々流星のやうな發火信號がその響の間から流れてゐた。まだ夜の十時頃だのに、街路には一人の歩行者もない。地上は全く鳴りを靜めて、呼吸を潜めてゐる。三百万の住民は今盡く穴倉の中で首を縮めてゐるだらう。


ノートルダム

と、不意に、ある響、大地を微かに震はせる響が、遠くに何物かの落下したことを告げた。と同時に、空が一時に明るくなつて、ノートルダム*の尖塔がかつきりとその明りの中に描き出された。爆彈の落下！　どこへ落されたのか。解らない。多分停車場かその附近だらう。と思ふと、砲聲が四方から

Notre Dam

ノートルダム　パリの有名な寺院。

響き渡る。今爆彈を投じた敵機へ向つて砲擊を加へるのだらう。けれども、一時の明るさもすぐ消えて、また闇がパリ全市を包んでしまつた。空は飛行機の唸りと發火信號の交叉とだけである。私は足音を忍ばせるやうにして寢床に歸つた。

一時間も經過したらうか。身を投げ出したやうな一種の諦めと、幽かな不安と、僅かな好奇心の雜つた心持、物を思ふでもなく思はないでもない心持、緊張したやうな、多少の投げ捨てたやうな心持、しんと靜まり返つた夜の中に、また時時窓を照し出す不意の明るさと大地を震はせる響。これが戰爭だらうか。

私は最早窓までいくのも煩はしいので、全く成行に任せて、

暗い中に一種の壓迫を感じながら仰臥してゐた。どこからか人聲がしだした。街上に何かの氣配がして、足音が聞え出した。かと思ふと、また警笛が町々を呼んで過ぎるのが遠く耳に入つた。

やつと濟んだと思つてゐると、不意に電燈がぱつとついて、一時に闇の壓迫を散してしまつた。室内の光景が一變した。寢床から跳ね起きて、大聲で「やつと濟んだ」と叫んでやりたくて耐らないやうな氣がしてゐると、がた〳〵と足音や人聲がして、階段を昇つて來る人々の騷が聞える。

ほつとした氣持、脫れてまあ好かつたといふ氣持、太い呼吸をして見たい氣持、そして、何人とでも今までの押しつけられてゐた氣分を語り合ひたいやうな氣持がしだした。私

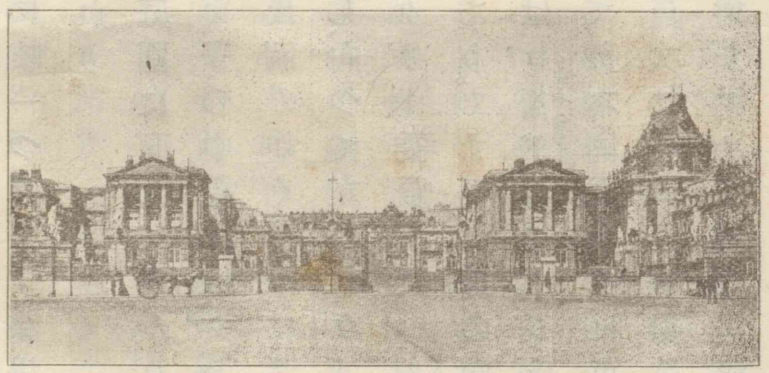
は急いで階段を降りていつた。

二九　平和は成れり

近衛文麿

六月二十八日、朝來暖煙輕く揚りて、曉風爽かなり。市街は各國の國旗を以て美々しく飾られ、幾組となき行列「ビーヴ、ラ、フランセー。」を唱へて、旗を振りつゝ市中を練り歩き、自動車の如きもまた思ひ〳〵に裝を凝したり。憶へば、過去五箇年の間、砲彈の音に、敵機の襲來に、心膽を寒からしめしことそも幾度ぞ。今や乾坤一轉して、藹然たる瑞氣の搖曳するを見る。パリ人の今日の喜や實に想察するに餘りありといふべし。

この日、ヴェルサイユ宮附近の混雜は名狀すべからざるものありしが、宮殿正門前の大通は帚目正しく掃き清められて、一切の通行を禁じたれば、一點の塵をも止めず。両側に堵列せる共和衛兵の銀色の兜と白き鹿革の洋袴と黑く光れる長靴とは、光彩陸離として莊重なるこの日の儀式を彌が上にも莊重ならしめたり。午後三時、各國全權委員は皆已に入場し、招待を受けたる人々及び新聞記者等もまた處狹きまでに詰めこみて、さしもに廣き鏡の間も些の餘地だになかりしが、今は近世の歴史に最も光輝



ヴェルサイユ宮

近衛文麿　公爵、明治二十四年生、講和全權委員。

六月　大正八年。

市街　ヴェルサイユのこと、パリの西南十一哩、人口四万餘。

ヴェルサイユ　ヴェルサイユ宮殿　市にある宮殿、ルイ十四世の建てたもので、世界第一の立派な宮殿といはれてゐる。

ある儀式を前に控ふることとて、流石に咳一つ聞えず、滿場靜まり返れり。

クレマンソー

見渡せば、庭園に面して置かれたる長き卓子の中央には、*クレマンソー氏(Clemenceau)例の如く椅子に深く腰を卻し、向つて左には、*ウィルソン氏(Wilson)を始として米國委員、次にイタリー(Italy)委員、次にベルギー(Bergium)委員あり。またク氏の向つて右には、*ロイド、ジョージ氏(Lloyd George)を始として英本國委員、次に英植民地委員、次に我が日本委員、*西園寺公爵を始め、順次に居流

ウィルソン

*クレマンソー　當時の佛國の首相。(1841—)

*ウィルソン　當時の米國の大統領。(1856—)

*ロイド、ジョージ　英國の首相。(1863—)

*西園寺公爵　名は公望、嘉永二年生。

れたり。いづれも黑のフロックコート(Frock coat)姿にて、華麗眼を欹てしむるものとては一も見當らざりき。更に眼を轉じて窓外を望めば、正面の有名なる噴水池の周圍には、共和衛兵圓陣をなして整列し、その背後には、特に今日に限りて庭園まで入るを許されし幾千の人々堵の如く並びて、調印の終るを今や遲しと待ち構へたり。

西園寺公望

午後三時を過ぐること五分、向側の扉は開かれて、滿場の視線一時にその方に注がるゝや、やがて二名のドイツ委員は、幾多の佛國將校に見守られつゝ入場し來れり。先なるは新外相ミュラー(Müller)氏にして、後に續けるは*ベル(Bell)氏なり。とも

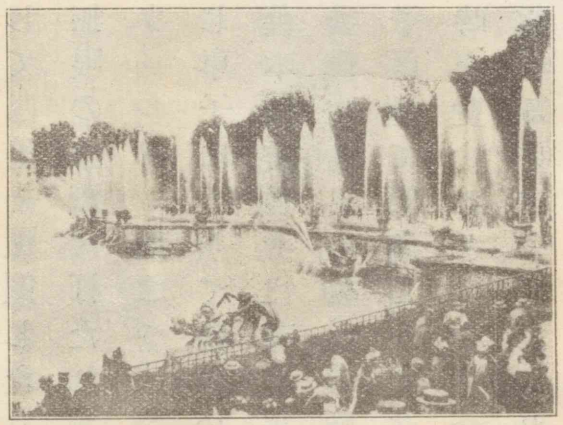
*ベル　當時の國務大臣。

にフロックコートを着し、稍俯向がちに、極めて物靜かなる態を粧ひつゝ、日本委員の隣なる定めの席に着けり。席定まるや、クレマンソー氏は徐ろに起ちて、まづドイツ委員より調印すべき旨を告ぐ。こゝに於て、ドイツ委員等はやをら起ち上り、案内せらるゝまゝに、クレマンソー氏の直前、條約の正文の置かれたる卓子の前まで歩を運べり。彼等は平靜にして殆ど何等の痛痒をも感ぜざるが如き態度を以て前に進み、代る〳〵條約の正文に署名したり。その間僅僅二三分時のみ。嗚呼、幾百万の人命と幾千億の財貨を犧牲として漸く贏ち得たる最後の結果はかくの如きか。ドイツの運命はかくして定まり了んぬ。見よ、自席に歸り行く二人の黑き姿の淋しくも憐なるを。これを、かの五十年

前、同じこの大廣間に於て、ウィリヤム老帝が、ビスマルク・モルトケを始め、雲の如き賢臣・名將に圍まれつゝ、威風堂々として四邊を壓倒したりし當時と對比し來れば、何人か心中無限の感慨に打たれざらん。ドイツ委員の座に復するや、ウィルソン氏まづ座を起ち、四名の米國委員これに從ひ、同じ卓子に至りて署名せり。次にはロイド、ジョージ氏以下英本國委員、次に英植民地委員、次に佛國委員、次にイタリー委員、次に日本委員の順序にて、各〻一團づつ代る〳〵その卓子に於て署名し、かくて最後のウルグァイ委員に至るまで、時を費すこと四十三分、調印を了したる國々は、山東問題に關する要求の容れられざりしを理由としてこれに加はらざりし支那を除き、凡べて二十六箇國、調印の全く終りしは

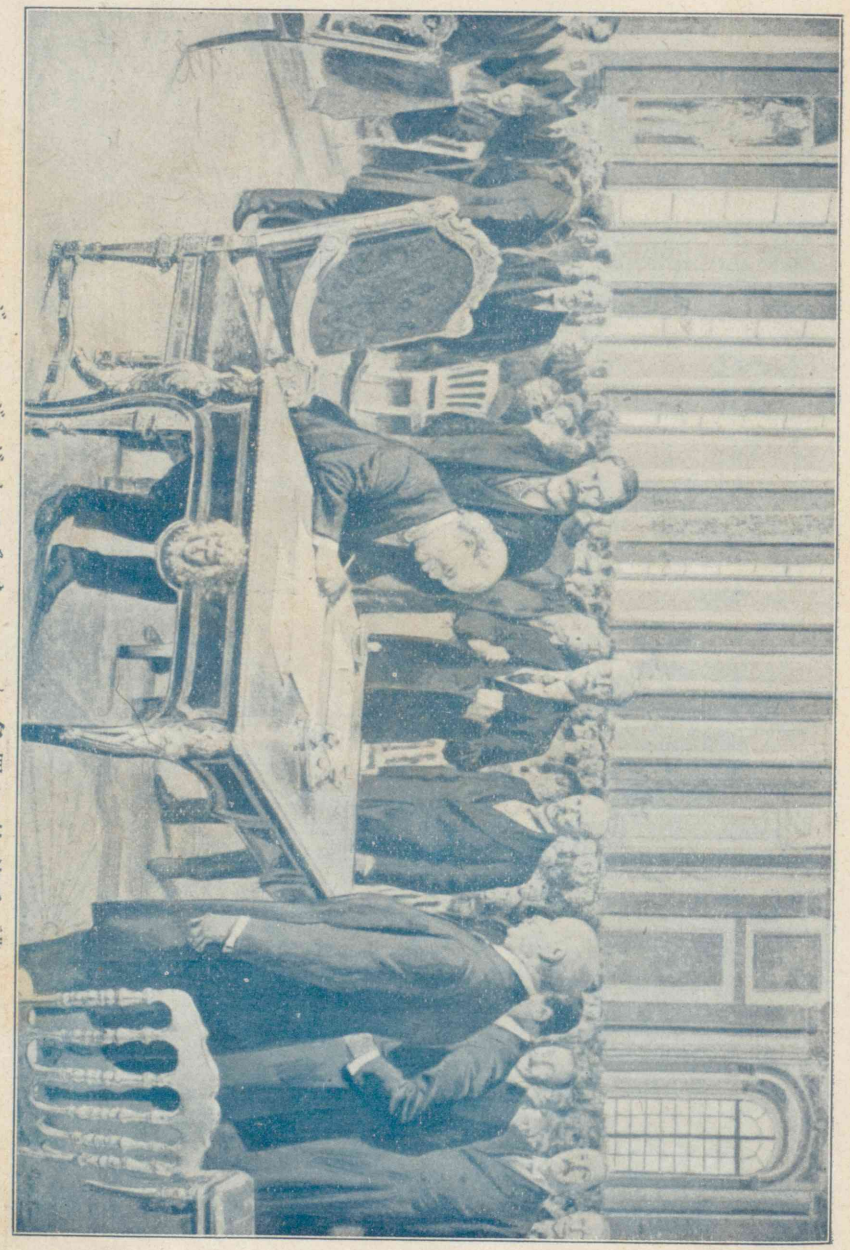
ウィリヤム老帝　ドイツの英主。(1797—1888)
ビスマルク　ドイツの大政治家。(1815—1898)
モルトケ　ドイツの名將。(1800—1891)
ウルグァイ　南米東南部の共和國。
山東問題　日本がドイツの租借權を繼承して經營してゐる山東省の青島を支那に還附することについての問題。

午後三時四十九分なりき。



ヴエルサイユ宮庭園の大噴水

こゝに於て、クレマンソー氏肅然として起立し、莊重にしかも簡單に宣言して曰く、「平和は今や成れり。」と。この時、世界に類なしと稱せらるゝヴェルサイユ宮庭園の大噴水は一齊に迸り出で、殷々たる百一發の祝砲は、宮殿の內外に蝟集せる幾十万の人々の歡呼の聲と相應じて、新たなる世界の出現を祝しぬ。



ジーヨジ、ドイロるあゝつし名署に約條和講

三〇　菅公夫人

山田新一郎

菅*公の夫人は北*野天滿宮の西域に祭られてある。夫人は菅公に別れて數年の後には、住むべき家もなくなり、吉祥院（きつしやうゐん）といふ菅家の菩提寺の一室に寄寓してゐられたので、普通吉祥女と称へられてゐる。昌*泰二年、夫人が五十歳に達した時、醍醐天皇がわざ〳〵祝賀の勅使をお遣はしになつて、從五位下をお授けになつたといふ外には、夫人の傳記は傳はらないが、當時有數の賢夫人であつたことは想像される。菅公の御子方は大勢あつたが、上の方の御子方は四人までも相當の位置に出身してゐたので、菅公と同時に諸國に流された。御子方が四人も揃うて相當の位置に出身したのは、夫人の内助も與つて力のあつたことと思はれる。

山田新一郎　京都の北野神社宮司。
菅公　菅原道眞。
北野天滿宮　官幣中社、京都市上京區に在る。
昌泰　醍醐天皇の年號。（一五八―一五九）

延喜元年一月二十五日、菅公が俄に太宰權帥に左遷されて、二月一日いよ〳〵都を立つて筑紫へいかれる時、

東風ふかば
　匂おこせよ梅の花
　あるじなしとて
　春なわすれそ

と詠まれたのは、草木に寄せて最愛の夫人に別れを惜しまれたものともいはれよう。西遷の道すがらも、都への便にことづけて、

「君が住む宿の木ずゑをゆく〳〵も

北野神社

延喜　醍醐天皇の年號。（一五六一一五八）

太宰權帥　昔筑前國にあつた太宰府の役人。

かくるゝまでにかへり見しはやと盡きぬ名殘を惜しまれたのも、即ちこの夫人に對してであつた。以てその琴瑟の情も偲ばれるのである。

夫人が京都の留守邸に於ける獨居の樣子は、菅公の作られた太宰府の詩で多少窺はれる。公が太宰府で衣食住ともに缺乏し、悲慘極る二箇年の月日を送られたのに比べて、京都の方もまたこれに劣らぬ境遇であつたことと想像される。菅公の太宰府で詠まれた詩の中に、「雪夜家竹ヲ思フ」と題して、

「家僕ハ早ク逃散シヌ　寒ヲ凌ギテ誰カ掃撤セン」

といふ句があつて、留守宅では下男も逃げた樣子だが、雪押竹の雪を拂ひ除けるものもあるまいと、故郷のことを氣遣

つてゐられる。この詩は、延喜元年即ち「去年今夜」の詩を詠まれた年の冬の作である。一朝にして右大臣を罷められ、食祿に離れ、しかも大臣暮しで育つた御子がたは大勢ある。留守居の夫人の苦勞が一通りや二通りでなかつたことは申すまでもあるまい。こんな困難な家、しかもお咎を蒙つた菅家のことであれば、はしたない下男どもも早々に逃げ出して、權門に走つたものと思はれる。夫人はかゝる困難を凌いで、御子がたを相手に留守を守つて、氣丈夫に家政を齊へ、夫を大事に思つてゐられたことは、更に次に引く菅公の太宰府に於ける詩に躍如として現れてゐる。これも延喜元年冬の作と思はれるが、「家書ヲ讀ム」と題して曰く、

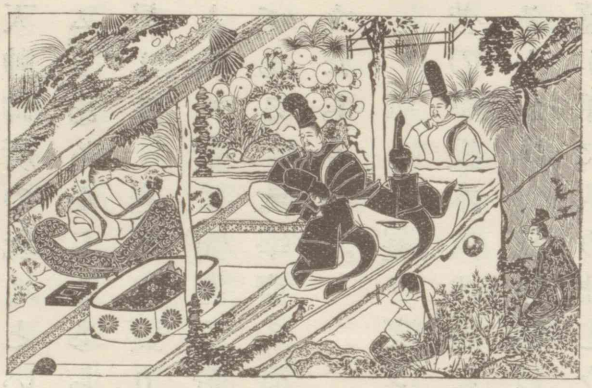
「消息寂寥タリ三月餘　便風吹キ着ク一封ノ書」

去年今夜侍二清涼一、秋思詩篇獨斷腸、恩賜御衣今在レ此、捧持毎日拜二餘香一。

三月餘も都の便が絶えて、甚だ寂しく感じたが、今日はいかなる吉日ぞ、東の風が我が家の手紙を吹きつけて來た、實以て嬉しいことである。

「西門ノ樹ハ人ニ移シ去ラレ」

これから以下の四句は、夫人の送られた手紙の内容を詠まれたものである。右大臣家の表門内であれば、松か梅か立派な樹が植ゑてあつたであらうが、今はその樹を人が持つていつた。多分米塩の代に樹を賣つたか取られたかしたのだらう。



配所の菅原道眞（北野天神縁起繪卷）

「北地ノ園ハ客ヲ寄居セシム」

天神御所の北地といへば紅梅殿であらう。「客ヲ寄居セシム。」とあるから、こちらの方は借家か下宿に出されたものと見える。庭木の賣り食ひに下宿業、これが昨日まで右大臣として帝の寵遇の斜でなかつた菅公の夫人の生計の有樣である。太宰府の菅公はどんな心持でこの手紙を讀まれただらうか。

「紙ニ生薑ヲ裹ンデ藥種ト称シ」

昔の草根・木皮の藥には、生薑の配煎が必要とされたのであるから、いはば、生薑は家庭衛生の必要品である。「たまに生薑が手に入りましたから、不時の用にと紙に包んで貯藏しておきました。」困難の中でも、一物も苟くもせられぬ夫人

の用意のほどが知られる。

「竹ニ昆布ヲ籠メテ齋儲ト記ス」

内のお祭の御供物も十分には辨じかねる境遇である。珍しく昆布を貫つたからとて、御子がたの總菜にもされずに、直ちに竹筒に入れて、お祭の時の神饌の用にしまはれたといふのである。

以上の四句は、千言万句よりも明かに、京地に殘された菅公一家の生活狀態を菅公の筆で現してゐる。なんたる悲慘な境遇だらうか。その反面には、夫人が凛乎たる決心を以て、百難を排して生計の方法を講じ、缺乏の中に祭事を大事にし、藥餌の果までも注意してゐられる。誠に行届いた齊家の有樣があり〳〵と見えるではないか。

「妻子飢寒ノ苦ミヲ言ハズ　コレ還ツテ余ヲ懊惱セシムルヲ愁フルガ爲ナリ」

留守宅の現狀は前のやうであるが、それをたゞその通りの事實として報じただけで、その餘は、徒に夫を心配させまいとてか、自分や子供の飢寒にせめられて困つてゐる愚痴は一言もいうては來ぬ。言はないどころか、「お留守はとにかくどうにか遣つてゐます。」と、却つて安心を求めて來る雄々しさは、なか〳〵並々の婦人で出來ることではない。榮華をこれ事とした當時の婦人社會では、指を屈すべき第一人だつただらう。實に菅公の夫人たるに恥ぢない人といへようと思ふ。

三一　漢土雜話

一

韓伯瑜といふ人、父を喪ひて母と二人して住めり。母は至りて嚴しき人にて、伯瑜に少しの過あれば、杖もて撻つを常とす。伯瑜痛さを忍びて、少しも怨める色なし。或日、母例の如く撻つに、伯瑜泣くこと頻りなり。母怪しみてその故を問へば、「これまで撻たるゝ毎に身の痛かりしかど、今日の痛からぬは母の年老いて力衰へ給へる故なりと思ひ、心弱くなりて泣くなり。」といへり。

二

春秋の頃、晏嬰といふ人、齊の國の相となれり。その御者馬に撻ちて、揚々として自得せる色あり。御者の妻これを見

て、夫にいふやう、「晏子は身の長六尺にも滿たず。しかるに、齊國の相として、その名諸侯の間に隱れなし。思慮深ければ、出入にも人に下る樣子あり。良人は身の長八尺、御者となりて誇らしき色あるは淺ましからずや。」といふ。夫大いに恥ぢて、これより自ら抑損せしかば、嬰はその志を賞して、次第にこれを高官に任用したりといふ。

三

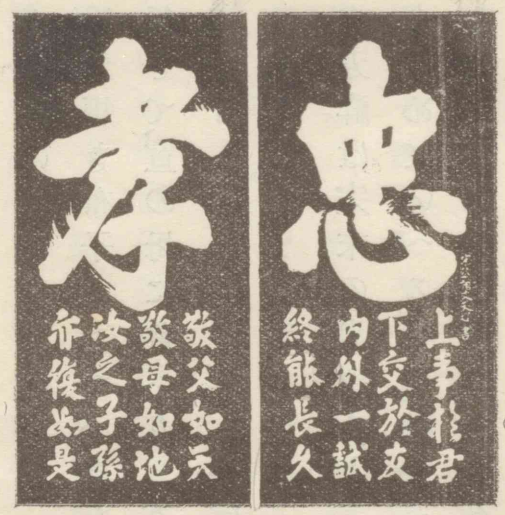
後漢の鮑宣の妻桓氏、字を少君といへり。宣初め少君の父に就きて學びしが、父、宣の淸貧に安んじて勉學せるに感じ、遂に少君をして嫁せしむ。富者のこととて、婚儀の用意善美を極めたり。宣これを見て、妻にいふやう、「少君は富貴に生れて、美衣美食に慣れたり。我貧賤なれば、いかにも釣合

ひがたし。」と。妻答へて、「父は君の德を修め約を守るを重しとして、入りて嫁せしむるなり。既に嫁したる身のいかでか良人の命に背かんや。」と。その日より侍女を返し、美衣を脫ぎ、短き布子を着て、小車を引きながら宣とともに鄕里に行きて、宣の母に會へり。これより薪水の業を親らして、婦道を行ふこと固かりしかば、人々歎稱せざるはなかりき。

四

文天祥は宋末の忠臣なり。その勤王の師を擧げし時、友あり、止めていへるは、「今、敵兵三道より薄る。君烏合万餘の兵を以てこれに赴かんとするは、群羊の猛虎を搏つに似たらずや。」と。天祥答へて、「國家今日の急に天下の兵を徵すに、一人一騎の赴くものなきこそ口惜しけれ。我が力の足らざ

るを知らざるにあらず。身を以て國に殉じ、天下の忠臣・義士をして風を聞いて起たしめんとするのみ。」と。聞くもの感動せざるはなかりき。軍敗れて虜となるに及び、元の相孛羅、天祥に問ひて曰く、「君既に宗社の保つべからざるを知りながら、なほ力を盡せしはいかに。」と。天祥曰く、「父母病あらば、快復の望なくとも、誰か一日も藥を廢せんや。元主これをその朝に仕へし救はれざりしは天命のみ。」と。遂に刑せられて死せり。（國定讀本）



文天祥筆蹟

忠
上事於君、下交於友、內外一誠、終能長久。
孝
敬父如天、敬母如地、汝之子孫、亦復如是。

自修文

一　妹安藝子

朝吹磯子

安藝さん！安藝さん！！

あなたはあの暗黑な世界へ永久に旅立つてしまひました。私達はどうしてもそれが事實だと信ずることは出來ません。

僅か十九年の短い生涯を、華やかに、そして多くの人々から愛されたあなた。私はそれをむしろ誇とさへ思つてゐましたのに、その安藝さんを一時に奪はれた私達親子兄弟姉妹の歎は、いつの世にか忘れられませう。

あの愛らしい顏、そして元氣な樣子で「お姉さまは？」と少し早口にいつて、玄關からはひつて來る姿が、またしても目の前にちらついて來ます。十九日・二十日の土曜・日曜、せひにといつて鎌倉へ呼んだ時、學校の歸りで、いつもの

安藝子　山口縣の人、陸軍中將長岡外史の第三女、女子學習院中學第五年生、大正十年二月二十日自動車に轢殺された。

朝吹磯子　明治二十二年生、安藝子の姉、朝吹常吉の妻。

十九日
大正十年二月

通りにこやかに、風呂敷包と、そして歐語會で彈くあのベートーヴェンのソナタの譜とを持つて、元氣よく來てくれました。その時は京さんも來てゐました。

京さんは、大磯へ轉地してからは氣分がいゝといつて、訪ねてくれたのでした。何年ぶりかで、姉妹三人が一緒に食事をしたことでせう。あの樂しかつた食事、それが永久のお別にならうとは、誰がその時氣づきませう。

長岡安藝子

「私が代つてあげたい。」と、始終京さんの病氣を心配してゐたあなたは、いつになく元氣な京さんを見て喜んでゐました。そして、二十二日は一兄さんの誕生日だから、何かあげたい。」といつて、二人で町へいきましたね。何もない鎌倉で、あれこれと二人して選つた五六種の食料品をお送りした時、いつものやうに、自分でなんでもするあなた

歐語會　女學習院の生徒間に組織されてゐる演伎會。

ベートーヴェン　ドイツの作曲家。(1770—1827)

ソナタ　奏鳴樂。

京さん　明治二十七年生、安藝子の姉、磯子の妹、園田武彦の妻。大磯神奈川縣。

始終　いつも。

一兄さん　名は護一、明治二十五年生、外史の長男、日本銀行員。(當時大阪支店在勤)

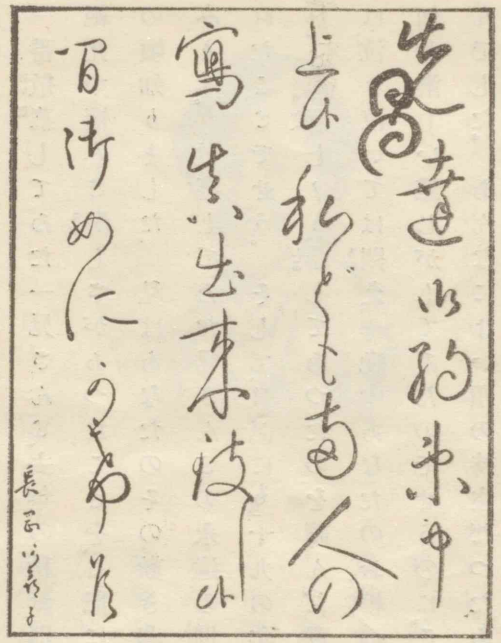
は、荷造から宛名書まで自分でしました。そして、「品物は粗末でも、心からの贈物が出來た。」といつて、滿足したやうに見受けられました。

一番敬慕してゐた一兄さんと、去年の秋お別れしてからのあなたの胸には、絶えず惱みと淋しさがあつたことを、日記に、歌に、女中の話によつて、漸くこの頃知りました。私はあなたのその歎き悲みが事實になつたことを悲しみます。敬慕してゐた兄さんとの永遠の別、それはどんなに悲しく感じられたことでせう。そして、日記にも、「十九の年に幸あれ、厄年の十九に幸福あれ。」と、繰返し〳〵誌してあつたのを讀んだ私は、堪へられなくなつて、讀んでは泣き、泣いては悶え、一晩中あなたのお棺の前で泣きました。きつと〳〵何か淋しい感じがしてゐたのでせうのに、それをあなたは誰にも話しませんでした。あんなによい頭の持主だつたあなたには、きつとなんとも言ひ得ない淋しさがあつたでせう。

あなたはキリスト教を信じて、何事も運命と諦めて、心に鞭つてゐたことを日誌で知りました。信仰のない私は、安藝さんのやうな可愛い人の最期が

厄年　災難のあるといふ年齢。

あまりに酷かつたことを呪はずにはゐられません、運命といふよりも、あまりに頻繁に起る事故ですから。安藝さんが亡くなつて僅か一日おいて、二十五日朝、私どものお友達のお子さんが、通學の途中、茅場町で同じ徑路で亡くなられ、續いて三光町で知人のお息子、また私どものお友達といふやうに、多くの方々が文明の利器に傷はれたことを深く悲しみます。交通整理の完全でない、しかも道路の狹い東京の町を、無鐵砲な運轉手によつて自動車を走り廻されることを、ほんとに恐ろしく感じます。



長岡安藝子筆蹟

私どもは、安藝さんの死が無意味でなく、この後は、道行く人も、自動車に乘る人も、また運轉手も、各自よく

頻繁にしきりに。
茅場町　東京市日本橋區
三光町　同芝區
先達御約束申上候私ども兩人の寫眞出來致し候間御めにかけ候　長岡阿喜子
利器　便利な器械。
各自　めいく。

注意して、この夥しい交通の事故が、少しづつでも少くなるやうにと祈つてゐます。

安藝さんは、元氣な、優しい、そして實行の人でした。私どもの子供の面倒までもよく見てくれました。或時は親以上に、學校の復習に、運動に、ピヤノに、よく導いてくれました。風呂にまで赤ちやんを入れてくれました。その親切な優しい若い叔母さんを失つたことは、私どもの子供のためにも限りない悲みでございます。大きい子供は安藝さんのお話の出る毎に泣きます。確かに私どもの子供のためにも非常な歎でございます。けれども、子供は安藝さんの殘していつたお手本によつて進んでいくでせう。安藝さんどうか安らかに。

あまりにも悲しき現いまもなほ
たゞ夢のごとまぼろしのごと
母の姿とみに老いしが目につきて
またも涙にむせぶこのごろ

夥し　多い。
母　名は芳子。

二　赤い鳥

小川未明

鳥屋の前に立つたらば　赤い鳥が啼いてゐた
私は姉さんを思ひ出す　町に住んでる姉さんが
電車や汽車の通つてる
ほんとに戀しい懷かしい

村の方からガタ馬車が
もう夕方か日がかげる
喇叭を吹いて駈けて來る

赤い鳥が啼いてゐた
鳥屋の前に立つたらば
黑い烟が上つてる
都の方を眺めると

三　月光の曲

小川未明、高田市の人、明治十五年生、名は健作、文學者。

音樂家としてのベートーヴェンは、ドイツでは子供でもその名を知らないものはない。ベートーヴェンは一千七百七十年にライン河(Rhine)に沿うたボン(Bonn)といふ町に生れて、一千八百二十七年にオーストリヤ(Austria)の首府ヴィエナ(Vienna)で死んだ人である。

まだボンにゐた時のことだつた、物凄いほど月の冴えきつた冬の夜、友人とともに散歩して、細い小路を通りかゝつた時、俄に足を止めて、

「あれは僕の作つた曲だ、いかにも上手に彈いてゐる。」

と獨言のやうにいつた。それは小さい賤しげな家の前だつた。二人は戸外に佇んで暫く聽いてゐたが、やがてピヤノの音がはたと止んだ。

「私にはもうとても彈けません。なんといふ美しい曲でせう。一度ケルン(Köln)の演奏會へいつて見たい。」

と、情ないやうにいつてゐるのは、若い女の聲である。

「家賃さへ拂へない今の身の上で、どうしてそれが出來よう。」

といふのは男の聲である。

佇む　たちどまる。
はたと　ばつたりと。
ケルン　ドイツのライン地方の都會。

ベートーヴェンはやをら戸を開けて、その家にはひつた。薄暗い燈火の下で、青ざめた元氣のなささうな若い男が靴を縫つてゐる。その傍に豐かな髪の毛を額に漂はせて、一人の娘が古いピヤノの前に坐つてゐる。知らない人が不意にはひつて來たので、二人は驚いた樣子。

ベートーヴェン

「御免下さい。私は音樂者ですが、あまりの面白さについ釣りこまれて參りました。私にも一曲彈かせて下さい。」

と、ベートーヴェンがいつた。娘の顏は紅に染まつた。青年はむつつりとして困つた體である。

「有難うございますが、私どものピヤノは誠に粗末で、それに樂譜もございません。」

と、男がいふ。

やをら　しづかに。
一曲　ひとふし。
體　やうす。
樂譜　音樂の譜。譜とは音の高低調子等を符號で記したもの。

ベートーヴェンは

「樂譜がない、それでどうして。」

といひさして、見れば、かはいさうに娘は盲である。

「これで澤山です。」

といひながら、ベートーヴェンはピヤノの前に腰を掛けて、すぐに彈き始めた。その最初の一音が既にその兄弟の耳には不思議に響いた。ベートーヴェンの面相は見る〳〵變つた。兩眼は異樣に輝いて、彼の身にはどみに何物か乘り移つたやうに見える。一音は一音より妙を加へ神に入つて、ベートーヴェンは既に何を彈いてゐるか覺えないやうである。兄弟はうつとりして、ひたすら感に打たれ、兄は手に持つた靴を取落して、驚きの目を見張つたきり、妹は少し頭を前に傾け、兩手をしかと胸に押當てて、その心臟の響が少しでもこの美しい音を亂さないやうにと、ピヤノの傍に蹲つてゐる。ベートーヴェンの友人も全く我を忘れて、一同夢に夢見る心地である。蠟燭の火が俄に消えた。友人は起つて窓の戸を開けると、淸い月の光は、ピ

面相　かほつき。
異樣　かはつたさま、ふしぎ。
とみに　急に、にはかに。
乘り移る　何かの靈がその身にやどる。人間わざとは見えないのでいふ。
神に入る　ふしぎにすぐれてゐて神わざのやうである。
感に打たれる　ひどく感心する。
我を忘れる　ぼんやりする。

ヤノとピヤノを奏でる人の顏とを照した。ベートーヴェンは彈く手を止めて、首をうなだれて沈思の體である。暫くして、兄は恐る〳〵近寄つて、熱心な、しかも低い聲でいつた。

「あなたはどうしたお方です。」

「まあお聽き下さい。」

と制して、ベートーヴェンはまた彈き始めた。

「嗚呼、あなたはベートーヴェン先生ですか。」

と、兄妹は思はず叫んだ。

月は益〻冴え渡つた。

「この月の光を題に一曲を。」

といつて、ベートーヴェンは暫く月影隈なく星疎らな空を眺めてゐたが、やをら指はピヤノに觸れたと思ふと、優しい沈んだ調は、恰も東の山の端に昇つた月が、次第々々に闇の世界を照すやうに、靜かに柔かに響き始めた。次いで來る奇怪な舞蹈曲の物凄さ。妖精の夜出でて庭の芝生に狂ふやうに、

奏づ　ひく。
うなだれる　くびをたれる。
沈思　しづかにおもひこむ。
月影隈なく　月に少しの暈もなく一面に輝いてゐるのをいふ。
調　てうし、ふし。
妖精　ばけもの。
奔流云々　勢よく流れる水が巖にぶつかり、おそろしい高浪が岸に當つて碎けるやうに、變化していく面

最後の快速な調は、飛ぶが如く、閃くが如く、奔流巖に激し、怒濤岸を嚙み、具に變幻の妙を極めた。三人はたゞ萬感交〻至つて、遂に茫然自失してしまつた。彈き終ると、ベートーヴェンは、

「今の曲を忘れない中に譜にしたいから。」

といつて、走るやうにして歸つたが、その夜は遂に夜を徹した。これがベートーヴェンの「月光の曲」といつて、不朽の名聲を博した曲である。（國定讀本）

四　梅が香

いつの世の庭のかたみぞ賤が家の垣根つゞきに匂ふ梅が香　　正岡子規

一つもて君を祝はん一つもて親を祝はんふたもとある松　　落合直文

牛の行く白川道の水ぐるまかたりと暇あるかな　　金子薫園

白味を十分に極めてゐる。
萬感交〻至る　いろ〳〵の思がかはる〳〵胸にせまる。
茫然自失する　ぼんやりして氣ぬけがする。
徹す　あかす。

正岡子規　名は常規、松山市の人、明治三十五年歿、年三十六。
落合直文　宮城縣の人、明治三十六年歿、年四十一。
金子薫園　名は雄太郎、東京市の人、明治十年生。

ゆら〳〵と朝日子赤くひんがしの海に生れてゐたりけるかも　齋藤茂吉

暫くを三間打ちぬきて夜ごと〳〵兒らが遊ぶに家わきかへる　伊藤左千夫

五　子供とその父

武者小路實篤

子供「お父さん、私は學校へいくのがいやなのですよ。だつて、皆が私のことを『先生の花』だといつて、いぢめるのです。私が一番なのも、私が出來るから一番なのでなくて、私が先生のお氣に入りだから、先生におべつか使つてお氣に入るやうにするから一番になるのだといふのですよ。花といふのはヒイキといふことなのよ。ヒイキといふ字が集つて花といふ字になるでせう。ですから、私は或時先生にさういつたの。『皆が、私の出來るのは、本當に出來るのではなくつて、先生のヒイキがあるからだ。本當の實力からいふと、私は五六番以上にはなれない人間で、たゞおべつかを使ふことがうまいので、私が一番になつてゐるのだつて。先生、それは本當ですか。本當なら私を五六番に下げて下さい。私は勉強して、自分が本當に出來る人間だといふことを示しますからつて。』すると、先生は笑ひながら、『そんなことは氣にしないがいゝ。出來る生徒は皆出來ない生徒からさう思はれるのだ。しかし、そんなことで參つてはだめだ。いひたいことはいはせておくがいい。世の中に出ると、もつと意地の惡い人がある。私達はそれを恐れてはだめだ。そんな意氣地のない人間は、いくら出來ても、偉い人間にはなれない。なんといはれても、自分の方さへ正しければそれでいゝのだ。皆にそれがわかつてもらへないでも、それは氣にしないがいゝ。孔子といふ支那で一番偉い人は、人に色々のことをいはれるのを氣にしてゐる人に、自分を省みて疚しいところがなければ、何も心配することはないとおつしやつた。あなたもさういふ覺悟でゐなければいけない。』とおつしやつた。私はそれを聞いて元氣になつて、皆に何をいはれたつて平氣だ。自分でそんなことを恐れはしない。さう思つてゐるの。ところが、意地の惡い生徒がゐて、そ

齋藤茂吉　山形縣の人、明治十五年生。

伊藤左千夫　名は幸次郎、千葉縣の人、大正二年歿、年五十。

武者小路實篤　東京市の人、明治十八年生、文學者。

れにまた、おべつか使つて色々のことをいふ人もくつついて、私を見ると『花が來た、先生の花が來た、臭い汚い花が來た。』といふ。そして、昨日晝休に歸つて來ると、机の上に花の畫がかいてあるの。そしてこんなことを聞えよがしにいふの。『出來ないで出來るものなァに。』『花。』私は腹が立つたの、私は口惜しかつたの。だけど、怒るわけにもいかなかつたの。聞えないふりをして、孔子のいつた言葉ばかり考へてゐたの。自分のためになることを皆望んでゐるのね。だけど、私はだめにはならないの。それが口惜しいの。殊に二番にゐる人が力が強いので、皆その人におべつか使つてゐるの。だから、意地惡をされるので、私の側に來られないの。意地惡に負けるやうな人は、私は嫌ひだから、私もさういふ人とはつきあひたくないのですが、學校にいくのが段々いやになつて、これでは困ると思つてゐるの。學校はいくらでもあるのですから、外の學校に移つたらどうかとも思ふの。外へいけば、こんなに酷い目には逢はないでも濟むと思ふの。」

父「お前のさう思ふのは無理だとは思はない。しかし、どこかへいけばいゝ

處があるかも知れないといふ心掛はよくない。それより、今にお前の本當の友達が、お前の級から出ることを信じて勉強していくがいゝのだ。もう少しで、きつとお前には本當にたよりになる友達が出て來るに違ない、お前さへ間違なく立派にやつていくなら。同じ孔子の言葉に、德のある人は獨りぼつちになることはない、必ず友達があるといつてある。お前も自分の學問が出來るといふことを自慢にしないで、―お前の自慢にしてゐないことは私も知つてゐるが、―そして、間違のない道を履んで僻んだり恨んだりせずに、人を信用し、いゝ人が必ずゐるといふことを信じて、少しでもいゝところをもつてゐる人には厚意を有つやうにしていくと、きつといゝ友達が出來、そしてお前が本當に立派な人間で、決して先生に媚びたり諂つたりしない、學問の本當に出來る人だといふことが皆にわかり出すに違ない。それは、二三の人はいつまで經つても、お前の惡口をいひ、お前を誤解させようと骨折り、そのためにはどんなことでもするかも知れない。だが、先生も仰しやる通り、そんなことは氣にしないで、默つてゐても、お前を知つて愛して

厚意　深切。
誤解　思ひちがひ。

ゐる人がどこかにゐて、その人がお前の公明正大な人間だといふことを腹の底から知つてくれることを信じて、なんといはれても平氣で、もつと立派な人間にならうと骨を折るのが一番偉いのだ。尤も無理をしてはだめだ。早く偉く思はれたかつたり、早く自分が正直な人間のやうに思はれたかつたりしてはだめだ。それは耐へるだけ耐へて、耐へきれないまで耐へてゐる内に、少しづつ芽が出て來るのだ。お父さんだつて、隨分惡口いはれたこともあるし、中傷されたこともある。山師だといはれたり、僞善者だといはれたり、賣名漢だといはれたり、新聞でたゝかれたり、心ある人にさへ背かれ、親友にまで無氣味な疑を抱かれかゝつたこともある。希望を失ひかけ、人間に愛想をつかし、何をしても始らないと思ひ、うるさいことがいやになつて、淋しく家に一人で閉ぢ籠つてゐたい時もあつた。しかし、さういふ時でも、お父さんは、『これはいけない、これは墮落だ、自分の德の足りないことを忘れて、他人をたよりにする罪だ。他人に何とか思はれたり言はれたりして、自分の値はそれで上り下りするものではない。自分の値はたゞ他人に惡口いはれて淋しくなる時に下り、他人になんと思はれても自分さへ正しくしてゐればいゝと思ふ時に上るものだ。』といふことを本當に知つてゐたから、それに打勝つてこゝまで來た。これからも何度もそんな目に逢ふだらう。だが、怖いのは自分をそのために賤しくすることだ。そんな目に逢つても、自分を益〻貴くすることが出來たら、それはこの上なく名譽なことだ。お前は苦しいだらう、また淋しいだらう。だが、私の子として、私よりももつと立派な人間になつてくれる氣なら、そんなことには驚かないでくれ。そして立派な人間になつてくれ。正しいと思ふことをする時は、出來るだけ大膽で、不正なことに對しては、あくまでも臆病であつてくれ。そして、どんな時でも自棄を起さずに、恥ぢるべきことを恥ぢる代りに、恥ぢてはならないことを恥ぢずに、立派に生きてくれ。心を僻ましてはいけない。お前の友達はきつとお前の學校にゐる、お前の級にゐる。いくらお前の價値を低く皆に思はせようとするものがあつても、心配することはない。眞價は一寸の隙間からも洩れて他人の心に觸れる。覆ひつくされる心配はない。」

中傷　他人の行を殊更に惡いやうにいつてその名譽を傷けること。
山師　詐欺師。
賣名漢　實の伴はぬ名を求める男。

子供「お父さん、私はもう誰になんといはれても恐れません、先生とお父さんとは私を知つて下さいますから。」

父「お前を本當に知つてゐるものは、私でも先生でもない。それは見えない處にゐる或者だ。それはお前の心の内にゐて、恥ぢるべきことと、恥ぢてはならないことを教へるものだ。そして恥ぢるべきことは決してしないやうにし、恥ぢてはならないことをするのに勇しく恐れないことだ。さあ、學校へいつておいで。花といはれることは恥ではない。媚びたり諂つたりすることは恥だが、媚びたり諂つたりしないのに、するやうに思はれるのを恐れるのも恥だ。他人の蔭口をきいたり意地惡をするのは恥だ、中傷するのはなほ恥だ。たが、蔭口をきかれたり、意地惡をされたり、中傷されたり、誤解されたりすることは恥ではない。それを恐れるのは恥だ。それに耐へ、それに動かされないのは實に誇だ。行け、我が子よ。恥しくない人間になつてくれ。友達は必ず出來る。出來ないでも恐れないものには、必ず友達は出來るものだ、その人相當の友達は出來るものだ。それは鏡に自分の

姿が映るやうに間違のないことだ。」

子供「お父さん、それではいつて來ます。」

父「いつておいで（我が子の後姿の見えなくなるまで見送つて涙ぐみながら）お前の一生も樂ではあるまい。だが、立派に生きてくれ。神よ、私を守つて下さるやうに、子供を守つて下さい。どうぞ、子供を幸福にしてやつて、勇氣を失はないやうにして下さい。よい友をお與へ下さい。私の過を赦して下さるやうに、子供の過をも赦してやつて下さい。そして私以上にお役に立てて下さい。だが、幸福にして下さい、もしお赦し下さるならば。」

六　宿かりの死

志賀直哉

大きな蝶螺の殼にはひつてゐる宿かりが、岩の上から、下に澤山集つてゐるきしやごを見下して、「小さいな。」と思つた。「相變らずうぢ〳〵してゐやがる。」と腹で冷笑した。彼は以前自分がその殼の一つにはひつて仲間のやうにしてゐたことを憶ひ出して、自分ながらよくもこんなに大きくなつたもの

志賀直哉　東京府の人、明治十六年生、文學者。

冷笑　あざわらふ。

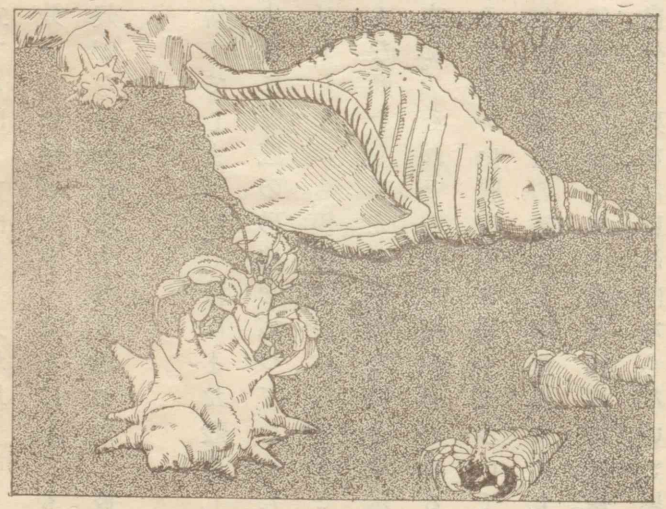
だと己惚れた。

宿かりは勢よくきしやごを押分けて、岩を駈け下りると、一度宙返りをして、どぶんと海の中へ飛びこんだ。「わあ―」といふきしやごどもの笑ひはやす聲が聞えた。「馬鹿どもが。」かう思つて、彼は大きなものだけが感じ得る寛大な心持を味ひながら、海の底をのそ〳〵と歩き廻つてゐた。彼は傍に何かごり〳〵といふ音を聞いた。見ると、それは自分よりも大きな蟻螺が、そろそろと岩を這ひ上つていくところだつた。彼は急に堪らない恥しさを感じた。彼は蟻螺に見つからないやうに、拔足差足そこを退いた。

一人になると、彼は急にむか〳〵と腹が立つて來た。そして、すぐむりやりに自分の殼を脫いでしまつた。砂地を今度はそろ〳〵と臆病に這つていつた。柔かい尻が砂で擦れて、痛くて〳〵やりきれなかつた。彼は苦しんだ。一日一晩苦しんだ。そして、やりきれなくなつた時に、丁度そこに非常に大きな法螺貝の殼を見出した。それは昨日彼を脅かした蟻螺よりも、更に更に大きかつた。彼は靜かに尻の方からその中に潛りこんで、やつと安

心した。その貝は重く、且彼の體にはゆる〳〵だつた。が、構はず苦しい思をしてそれを曳きずつて歩いた。彼はまた大きくならうといふ欲望に燃え立つた。

一年ほど經つた。そして彼は驚くべき發育で、その法螺貝の中に一杯の大きさまで育つた。もうそれを曳きずつて歩くことはなんの苦もなくなつた。彼はあまりいら〳〵しなくなつた、前ほどには大きくならうといふ欲望も燃え立たなくなつた。その時、彼は偶然またすてきに大きな法螺貝にでつくはした。彼は吃驚した、殆ど氣絕しかけた。彼は蟻螺の殼にはひつてゐた時、大きな蟻螺に逢つた時より



偶然　ひよつと。
すてき　大層。

も倍の倍も自分を恥しく感じた。腹を立てるにしては、もう力が足らなくなつた。彼は全く自分に失望した。自分がどれほど大きくなるにしても、そこにはいつも自分だけの大きさの貝殼がなければならぬと思つた。彼は全く絶望してしまつた。

彼は直樣自分のはひつてゐる法螺貝を捨ててしまつた。彼はまた殼なしで、痛さを我慢して、そろ〳〵と大病人のやうに海底の砂地を這つていつた。時々、その傍を、輕蔑するやうな横眼づかひをしながら、伊勢鰕がぴん〳〵と勢よく跳ねて通つた。龍の落子がけゞんな顏をして、立ち留つて彼を見送つてゐた。彼は愈やりきれなくなつて來た。それでも、まだ何かを求めるやうに、海の底を一方へ〳〵ずる〳〵とその柔かい腹を曳きずつて歩いていつた。路々彼がはひれるぐらゐの大きな法螺貝の殼にも出逢つた。しかし、彼は今更それに潛りこまうといふ氣はしなかつた。彼は極端に憂鬱になつた。力も萎えて來た。彼はもう自分も死ななければならないと思つた。なぜ自分の生涯の結末がこんなにならなければならなかつたらう

輕蔑　ばかにすること。
けゞん　ふしぎ。
憂鬱　氣分のふさぐこと。

かと考へた。それよりも、何がたゞの宿かりでゐられない欲望を自分に與へたのだらう、そしてそれはなんのためだらうと考へた。彼がきしやごの殼にゐた頃の夢想は、遠の昔彼に來てしまつた。が、それは彼に何の幸福をも持つて來なかつた。彼は常に滿たされずに來たのだ。彼の精神も肉體も段々にまゐつて來た。とう〳〵動けなくなつた。そして死んだ。

彼はその時絶望と苦悶を顏に表したまゝ、永久に眼を閉ぢたのだつた。しかし、誰もその表情はもとより彼の心理については何も知らなかつた。

まゐる　弱る、衰へる。
苦悶　くるしみもだえ。

新制
女子國語讀本　巻四
終

同字一覧

（こゝに同字といふのは、一般に略字・俗字・訛字・同字・慣用字などといつてゐるもの一切を包括したものである。＊印の附けてあるのは、元來別字であるが、今日は同字として廣く用ひられてゐるものである。）

万	萬
両	兩
壱 壹	一
参 參	三
串	弗
丈	丈
丑	丑
卋	世
乗	乘
乱	亂
弐 貳	二
亘*	亙
亜	亞
仍	仍
伹*	但
佞	佞
俟	竢
倣	倣
倚	倚
体* 躰 體	體
僣*	僭
仏	佛
仮	假
傲	傲
仐	傘
会 会	會
今	今
令	令
仝 仝	同
並 並	竝
辛*	辛
亡	亾
内	內
京	京
免	免
兎	兔
円	圓
冊 冊	冊 册
冐	冒
冨	富
冥	冥
决	決
况	況
准 準	準
凉	涼
減	減
滅	滅
冲	沖
凡 几	凡
凾	函
刄	刃
剪	翦
苅	刈
別	別
劔	劍 劒
刱	創
刘	劉
効	效
労	勞
勲	勳
励	勵
勧	勸
勢	勢
勅	敕
勺	勻
夘	卯
即	卽
却	卻
疋	匹
区 區	區
兼	兼
卑	卑
卆	卒
恊 協*	協（ケフ）
厨	廚
厩 廐	廏
厠	廁
断	斷
厚	厚
双	雙
収	收
叟	叟
叙	敍 敘
唇*	脣
器	器
囬	回 囘
四*	四
口 国	國
囲	圍
図 啚	圖
叶	協（カナフ）
嚠	畱
叫	叫
去*	云
吉	吉
告	吿
呈	呈
含	含
咏	詠
貟	員
善	善
甞 嘗	嘗
阪 坂	坂
場	場
塩 塩	鹽
塚* 塚	塚 冢
墻	牆
壮 壯	壯
夛	多
梦 夣	夢
夹	夾
竒	奇
奬	奬
弉	奘
奬 弊	弊
奥 奧	奧
姫*	姬
姸 妍	妍
妊	姙
嬪	嬪
嫩	嫩
姉	姊
斈 学	學
寇 冦	寇
実	實
宝 寶	寶
賓 賓	賓
害	害
写 冩	冩 寫
尅	剋
尋	尋
対	對
帽 帽	帽
并	幷
届*	屆

属	屡	岳	峩	峯	嶌島	崕	嵓喦岩	廪	菴	強强	弥彌	弯	彚	彛	彦	徃	徑径	徴	御
屬	屢	嶽	峨	峰	嶋島	崖	巖	廩	庵	彊	彌	彎	彙	彝	彥	往	徑	徵	御
彷	彿	懽驩	従	忘	志	慍	慙	恒*	憇憩	懴	愁	応	懐	悦	惧	恋	㦸	戯戱	抅
髣	髴	歡	從从	忘	志	慍	慚	恆	憩	懺	愁	應	懷	悅	懼	戀	戟	戲	拘
抜	挿	拝	払	扣	担*	携攜	挙擧	捐	整	改攺*	教	散	数	変	攵	既旣	昂	晋	旨
拔	插	拜	拂	控	擔	攜	擧	捐	整	改	敎	散	數	變	文	既	昻	晉	旨
昼	暦	者	曷	昏	曽	朽	桿	椅	村	柿	案	碁棊	楫	槁	槪概	朴	栖	条	染
晝	曆	者	曷	書	曾	朽	杆	檣	邨	柹	桉	棋	檝	槀	槩	樸	棲	條	染
杤	栄*	鎗	枢樞	様	槗橋	梠	栁柳	桧	欠*	欵	歴	皈帰	歩	死	殁歿	殱	毒	氷	气気気
栃杤	榮	槍	樞	樣	橋	櫚	柳	檜	缺	款	歷	歸	步	死	歿	殲	毒	冰	氣
涅	濶	潜潛	汙	温	浅	泪	渕	没沒	法	洒	湧	漆	溯遡	渋	浜濱	湿	沢	燄焔	熔
涅	闊	潛	汚	溫	淺	淚	淵	沒	法	灑	涌	漆	泝	澀	濱	濕	澤	焰	鎔
煙	灰	炎	煮	熈	灯	炉	黒	無	争	為爲	尓爾	独	猟獵	献	珎	瑣	丁甼	畠	畄畱畱
烟	灰	炎	煮	熙	燈	爐	黑	无	爭	爲	爾	獨	獵	獻	珍	瑣	町	畑	留
畆畒	畧	異	画畫	当	痴	発	盗	尽盡	睹	看	眄	呰	確	碍	研	頴	礼	祢禰	祓
畝畞	略	異	畫	當	癡	發	盜	盡	覩	看	眄	眥	確	礙	硏	穎	豊禮	禰	祓
秘	稿	穉稺	称稱	窃	窮	窓窻	竈	竸	笑	籖	簒	笄	粮	穀	糀	紀	繊	纒	糺
祕	稾	稚	稱	竊	竆	窗	竈	競	笑	籤	篡	笄	糧	穀	麹	紀	纖	纏	糾

網	総惣	綵	帋	綫	糸*	継	絹	縄	罸	羈	美*	群	羮羹	耻	聟婿	聨	聴	声	粛
網	總	綵	紙	線	絲	繼	絹	繩	罰	羇	美	羣	羹	恥	壻	聯	聽	聲	肅
脉	腸	膝	胷*	冑	脳	卧	致	台*臺	舗	舘館	舎	艶艷	舩	花	荒	蔭	莽	萠	蕚
脈	腸	膝	胸	胄	腦	臥	致	臺	鋪	館	舍	豔艷	船	華	荒	蔭	莽	萌	萼
盖葢	蕊蘂	甦蘓	荅	葛	芦	虎虎	処處	虚虛	虜	蛩	蛍	虱	螳	蟆	虫*	蛎	蚕*蠶	蛮	蝿
蓋	蕋	蘇	杏	葛	蘆	虎	處	虛	虜	蛩	螢	蝨	蟷	蟇	蟲	蠣	蠶	蠻	蠅
衛	裡	袵	衿	覀*	覇	覧	規	觧解	記	托*	識	讎	詫*	謚	証*	護	読	諌	謟*諂
衞	裏	衽	襟	西	霸	覽	規	解	記	託	識	讐	詫	諡	證	護	讀	諫	諂
訳	諌	讃	豊*	象	豹	犯	賛	質	頼	負	貪	谿	躅	蹟迹	躬	躯軀	輙	軌	韋
譯	諫	讚	豐	象	豹	犯	贊	質	賴	負	貪	溪	躅	跡	躳	軀	輒	軌	韋
辞辭	弁辨	弁	辰	達	過過	遁	迁	辺邊	迠*	逸	遊	撰*	郎	郷	隣	医毉	配	采*	釈
辭	辨	辯	辰	達	過	遯	遷	邊	迄迨	逸	遊	選	郞	鄉	鄰	醫	配	采	釋
釡	針	鉄鐵	鎖	鉾	銹	戋銭	鑒	間	関	閲	陥	隔	隙	陰	陁	厂雁	虽雖	襍雑	雞
釜	鍼	銕鐵	鎖	矛	鏽	錢	鑑	閒	關	閱	陷	隔	隙	陰	陀	鴈	雖	雜	鷄
隷	炅霊靈	青	韵	頥	类	顕	顛	余	餐	馬	駄	駈駆驅	馿	駅	髪	闘	欝	魚	鰐
隷隸	靈	靑	韻	頤	類	顯	顚	餘	餐	馬	馱	驅	驢	驛	髮	鬪	鬱	魚	鱷
鳥	乌	鵝	鶴	鹿	麁	麗麗	麦	麺	麻	黄	黾	皷	鼡鼠	斉	斎	歯	齢	竜龍	亀
鳥	烏	鵞	鶴	鹿	麤	麗	麥	麪	麻	黃	黽	鼓	鼠	齊	齋	齒	齡	龍	龜

別字一覽

左の文字は全然別字である。＊印を附けた文字は今日同字として廣く用ひられてゐる。

＊亙わたる　亘桓に同じい
＊体あらい　體からだ
＊但たゞし　但　拙い
＊僭みだり　僭身分を越え　僭ておごる
刃やいば　刃きず
叉こまぬく　叉爪の古字
＊云産む　云いふ
支うつ　支さゝふ　支えだ
壬ぬきでる　壬みづのえ
刋きる　刊けづる
＊協おびやかす　協かなふ
＊四よつ　四あみ
糸細い糸　系つぐ
＊串うがつ　弗くし
＊辛からい　辛つみ
肓むなさき　肓めくら
＊冑かぶと　冑よつぎ
兎ゆるす　兎うさぎ

＊屆届あな　屆とゞく
易かはる　易陽の古字
刺そしる　刺もとる　刺さす
＊糾あざなふ　糾告げる
＊台語に用ひる　臺うてな
壺つぼ　壺みち
＊糸細い糸　絲いと
＊頤みる　頤おとがひ
＊賣うる　賣てらふ
彊つよい　疆さかひ
鍊くさび　鍊きたふ
＊褻かされごろも　褻けがれる
＊月つき　月肉づき
＊欹なげく　攲そばだつ
＊虫魚介の總稱　蟲むし
傅かしづく　傳つたへる
掾たすけ　掾たるき
登たかつき　登のぼる

＊西おほふ　西にし
＊詫わざむく　詫あざむく
＊諂へつらふ　諂うたがふ
＊証いさめる　證しるし
＊豐禮の古字　豐ゆたか
＊迄まで　迄行く
＊蚪みづち　蚪やくし
＊妹いもうと　妹（人の名）
門かど　門たゝかふ
＊劵わりふ　劵つかれる
＊姬つゝしむ　姬ひめ
＊托おす　托たのむ
＊担あげる　擔になふ
＊改神の名　改あらためる
＊負おふ　負神の名
苗なへ　苗あじか
段きれ　段かり
欠あくび　缺かく

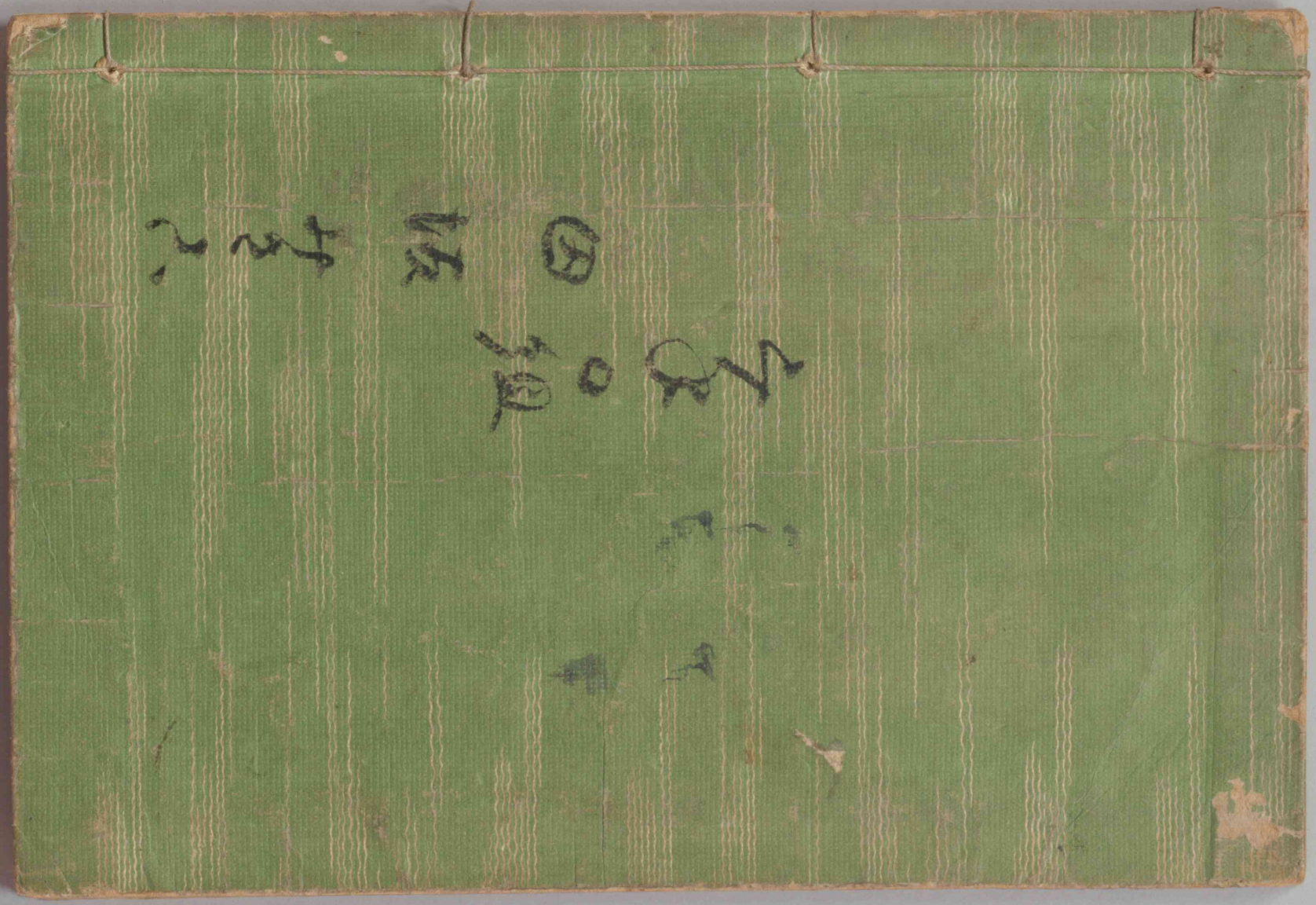
冠かんむり　冠あだ
＊槍やり　鎗の形容　鎗の鐘の聲
浙江の名　浙米なと　浙ぐ
陝せばい　陝地名　陝（陝西）
俳たはむれ　俳立ち休む
＊後のち、うし　后きみ
班わかつ　班まだら
訴欣に同じい　訴うつたへる
商あきなふ　商もと
祇地の神　祇つゝしむ
＊羨地名　羨うらやむ
鍛きたへる　鍛かぶと
籍席　籍書
＊選えらぶ　撰書物を編　撰纂する
郤ひま　郤しりぞく
＊塚ちり　塚つか
毋なかれ　毋つらぬく　母はゝ
已おのれ　已やむ　已すでに　已み

大正十一年十月二十七日　印刷
大正十一年十月三十日　發行
大正十二年一月四日　訂正再版印刷
大正十二年一月七日　訂正再版發行

新制女子國語讀本
卷一——四　定價　金四拾參錢　金七拾參錢
卷五——十　金四拾錢　金六拾八錢
（大正十二年度臨時定價）

著作者　開成館編輯所
東京市小石川區小日向水道町八十四番地
發行兼印刷者　株式會社　東京開成館
代表者　渡邊良助
西部販賣所　大阪市東區北久寶寺町心齋橋通角　三木佐助
東部販賣所　東京市日本橋區數寄屋町九番地　林平次郎

著作權所有
檢印

發行所
東京市小石川區小日向水道町八四
振替貯金口座東京第五參貳貳番
株式會社　東京開成館

東京三協印刷株式會社　印刷